

始

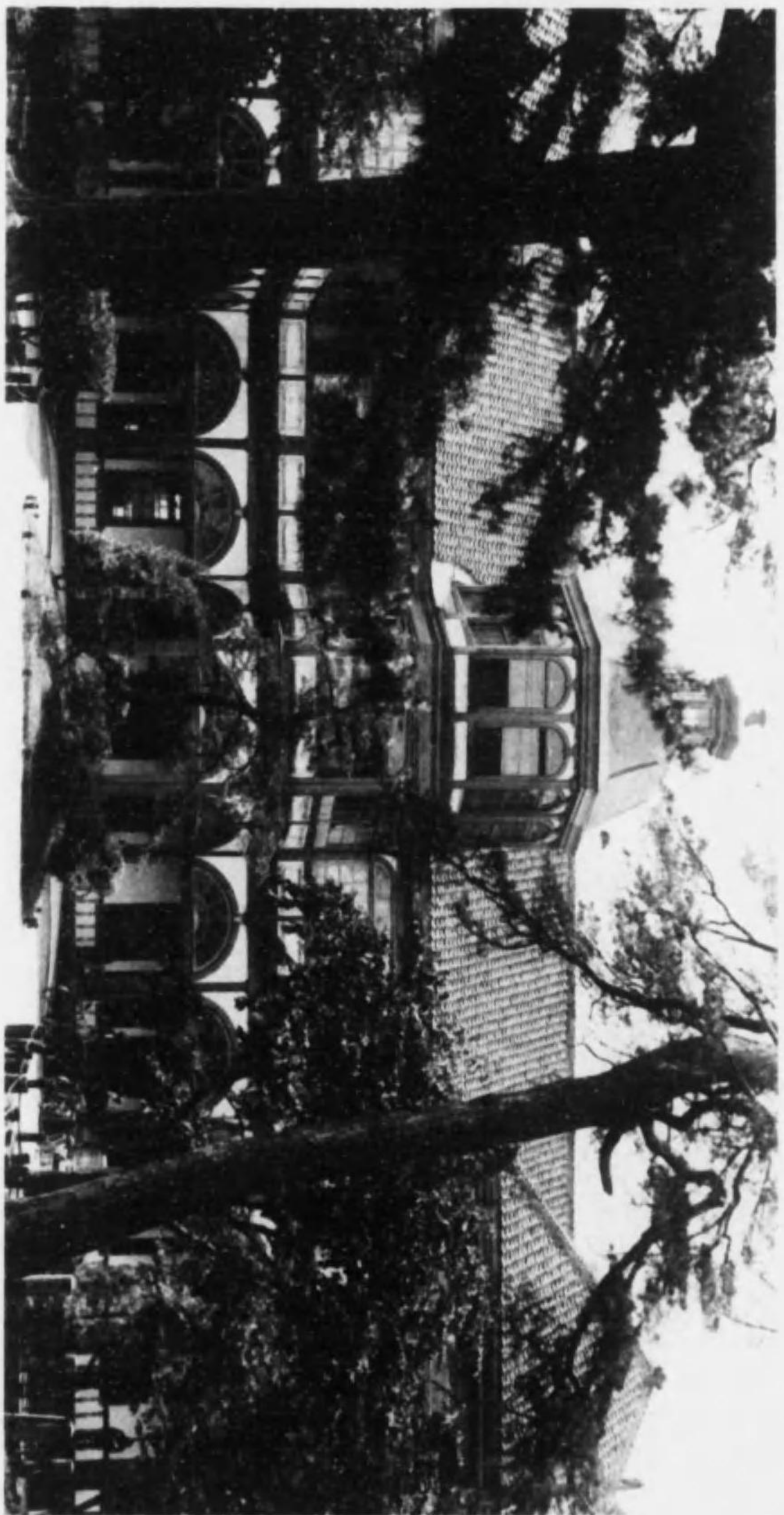


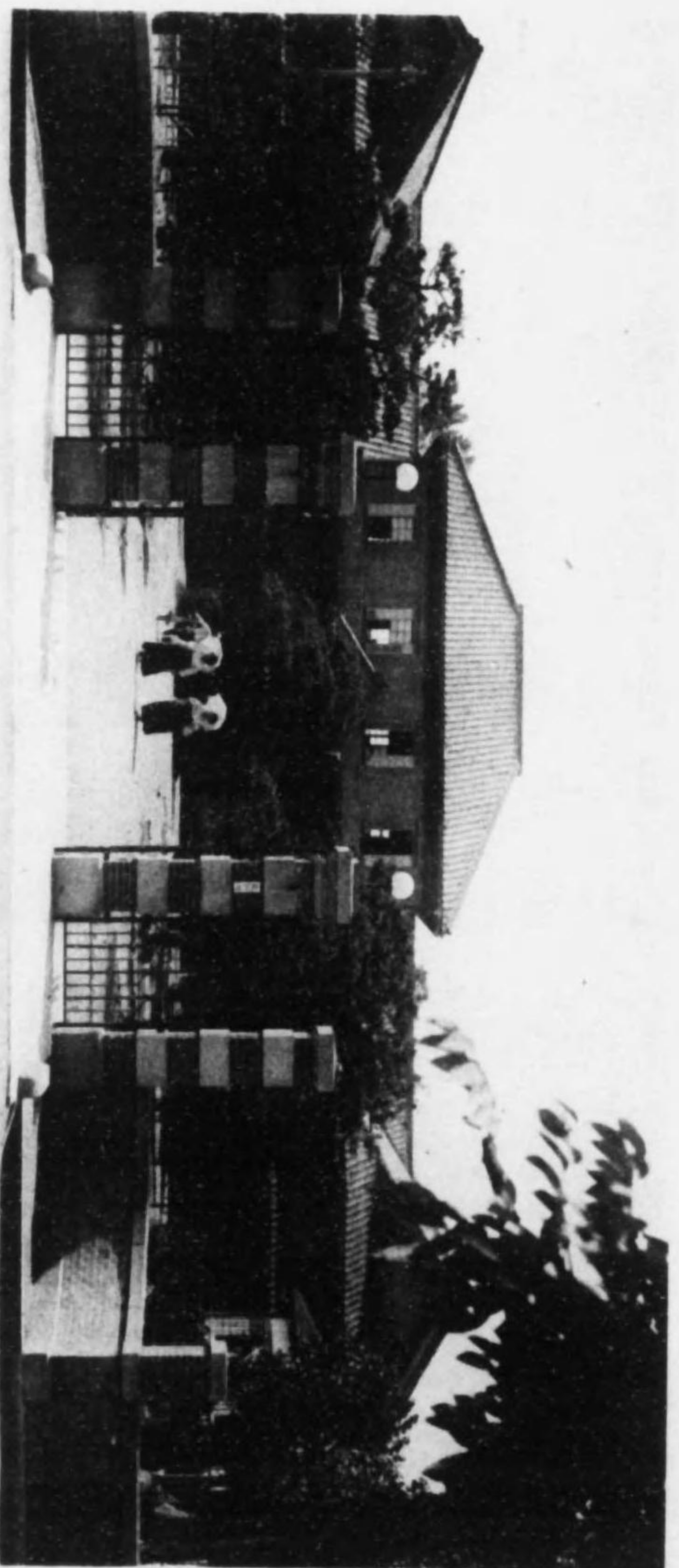
特261
521

李森

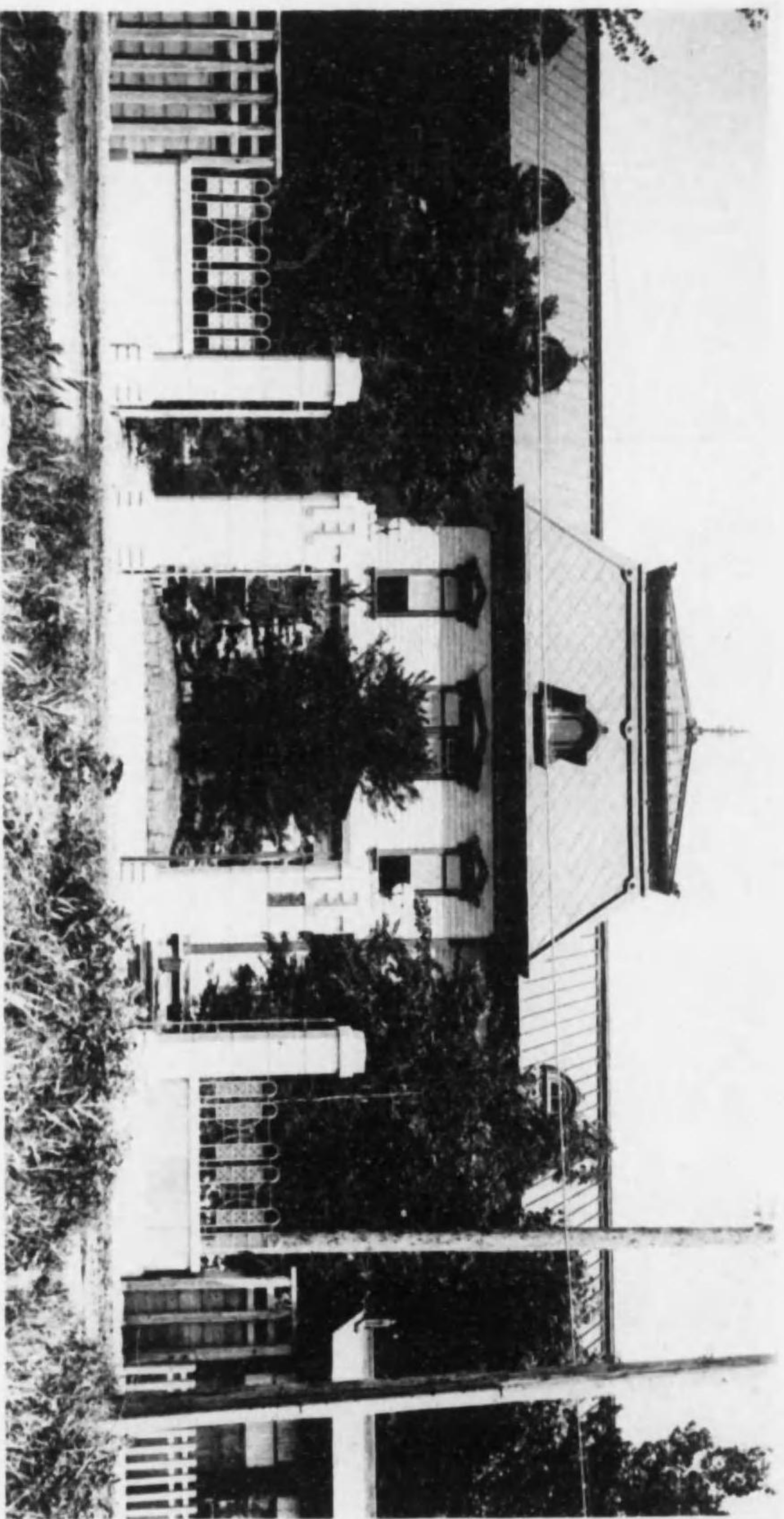
李森

青 森 縣 廳

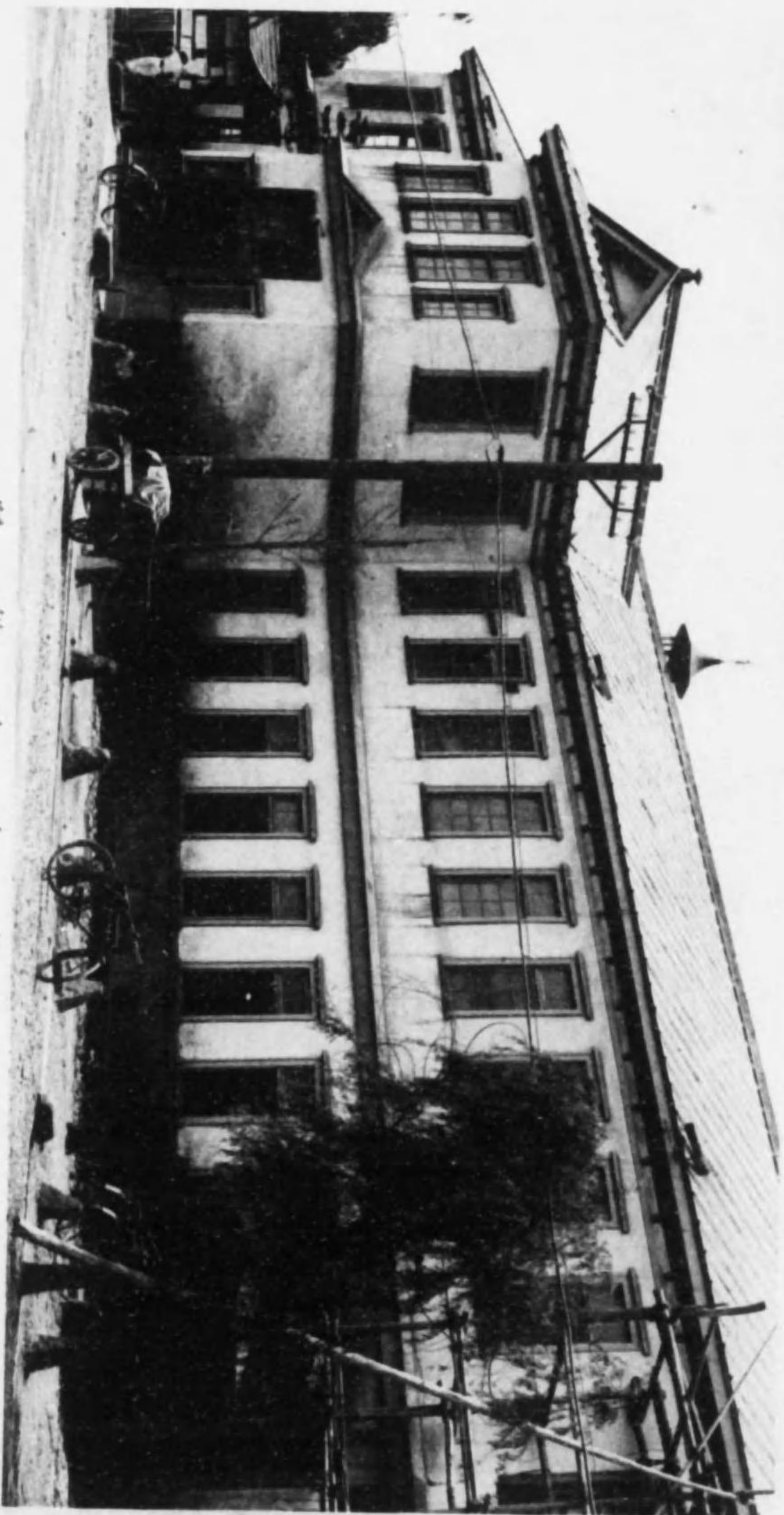




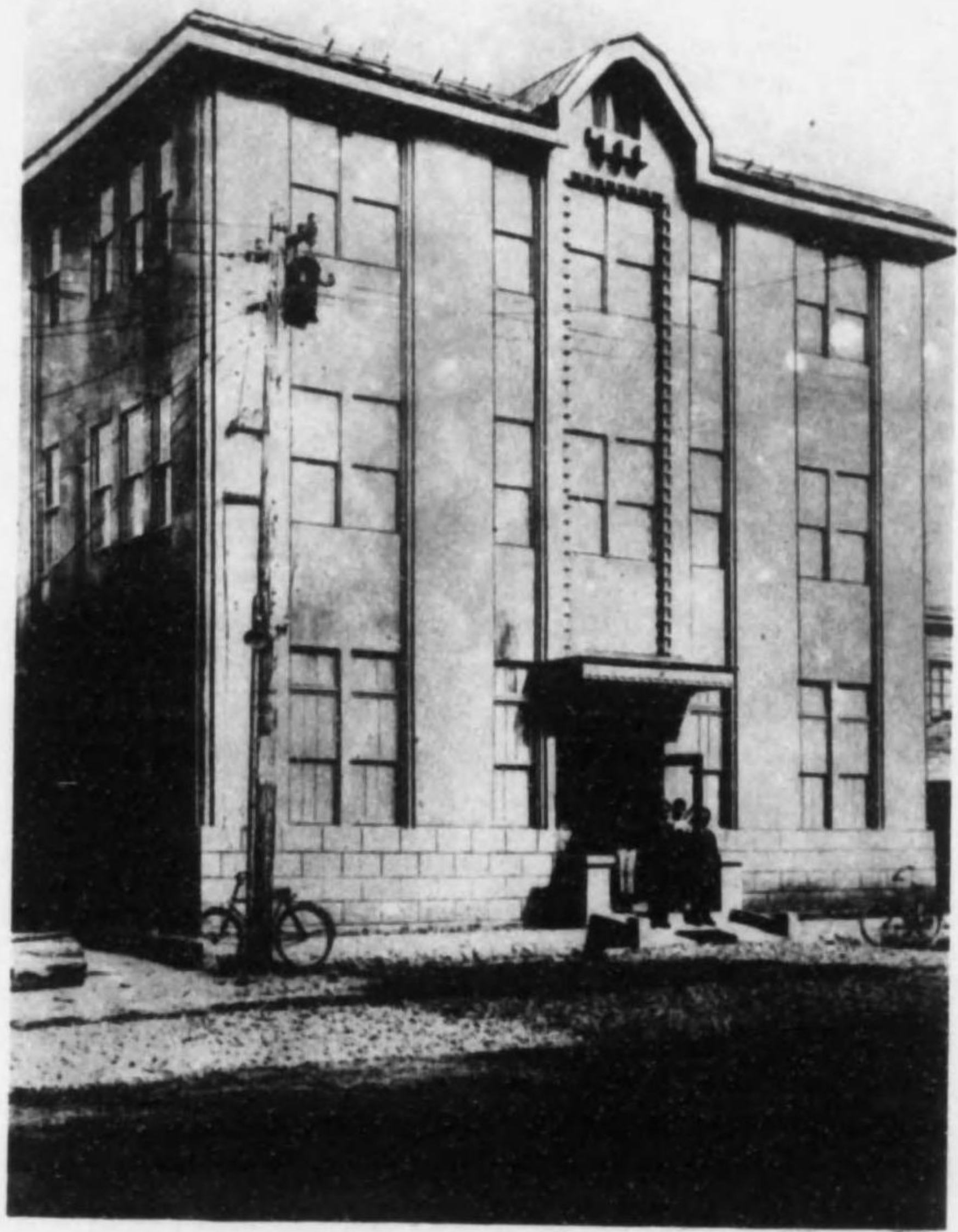
青森地方裁判所



青 森 營 林 局



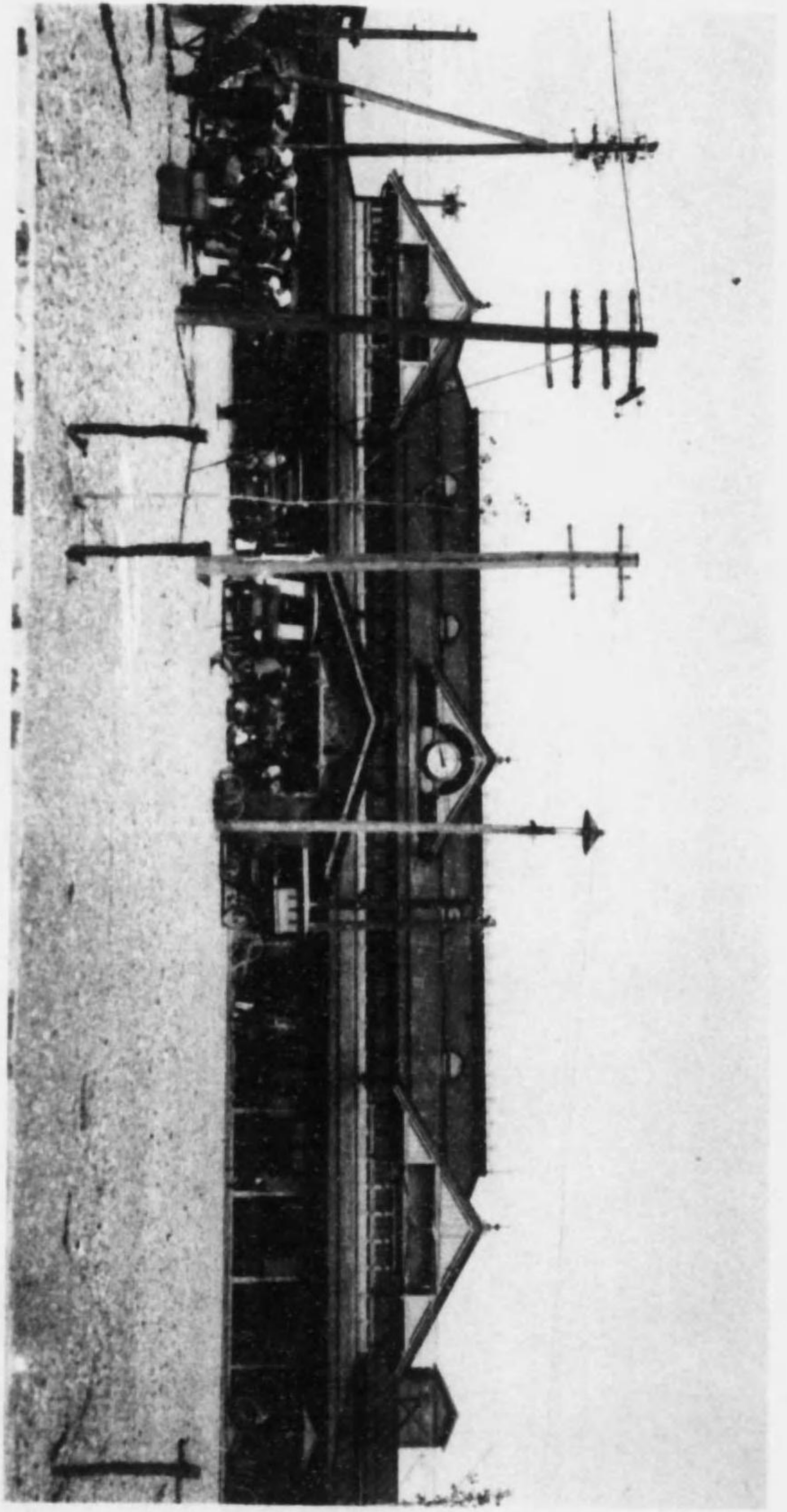
所 役 市 森 昔



青森市職業業紹介所

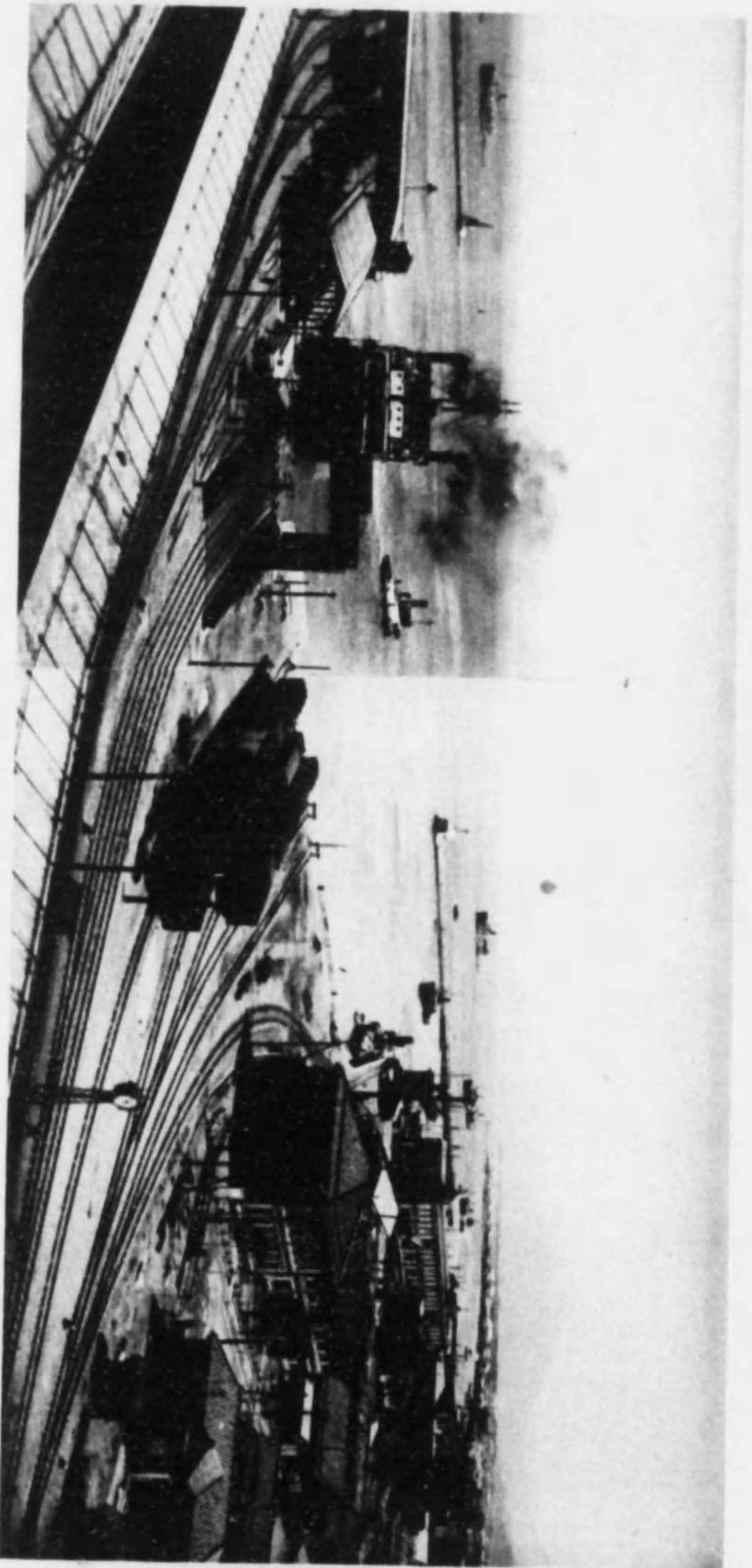


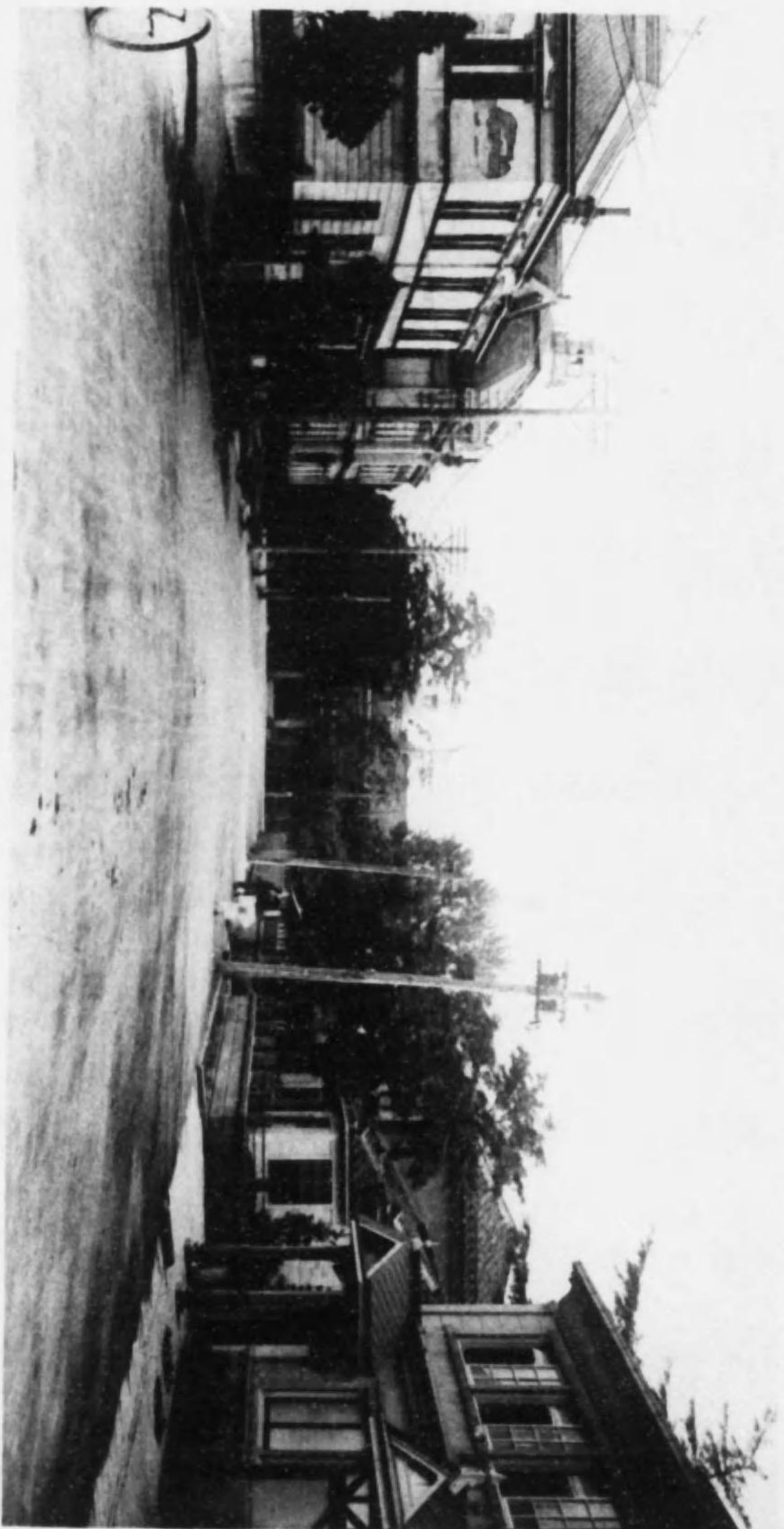
青森市公會堂



青 海 街

青 函 連 絡 船

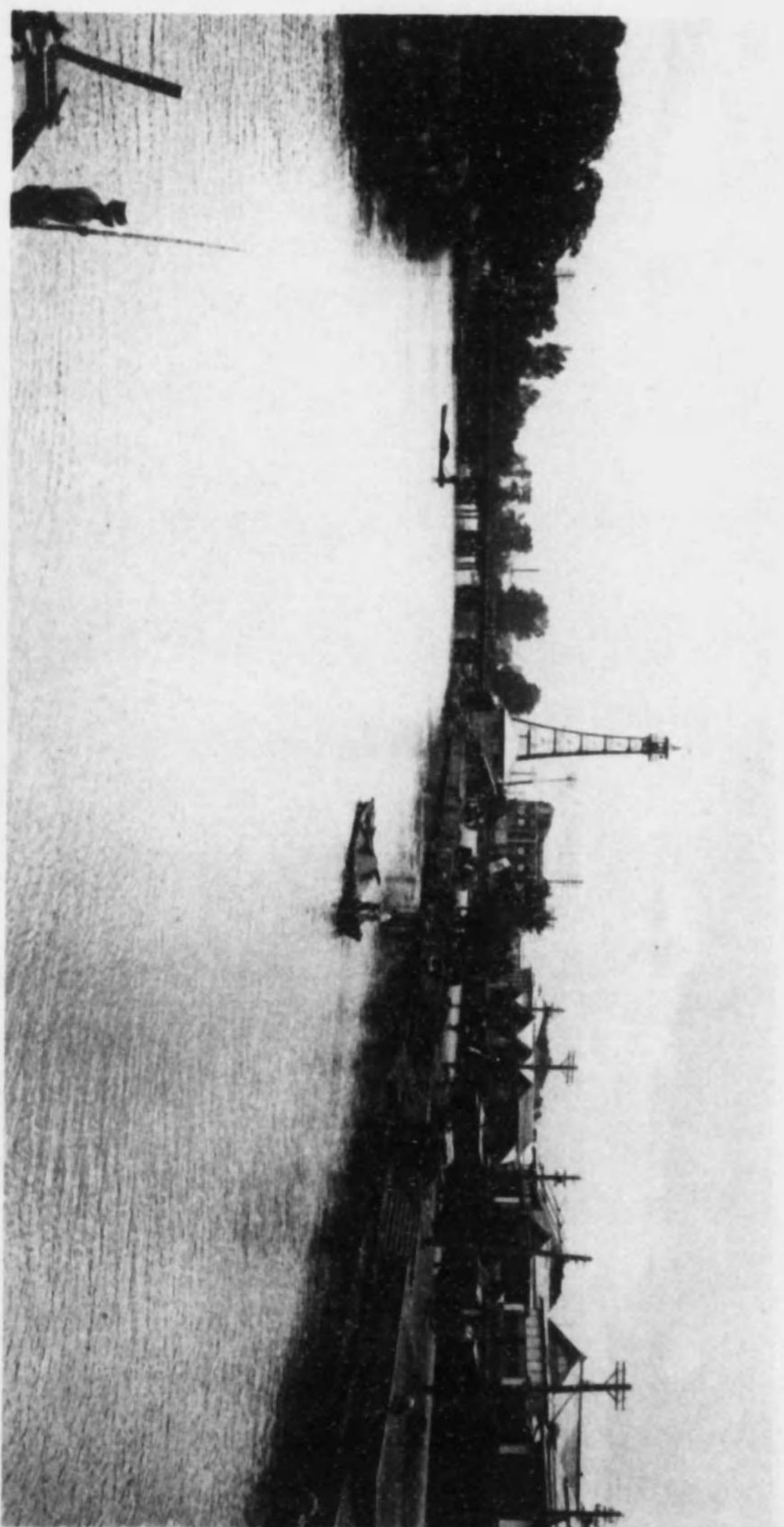




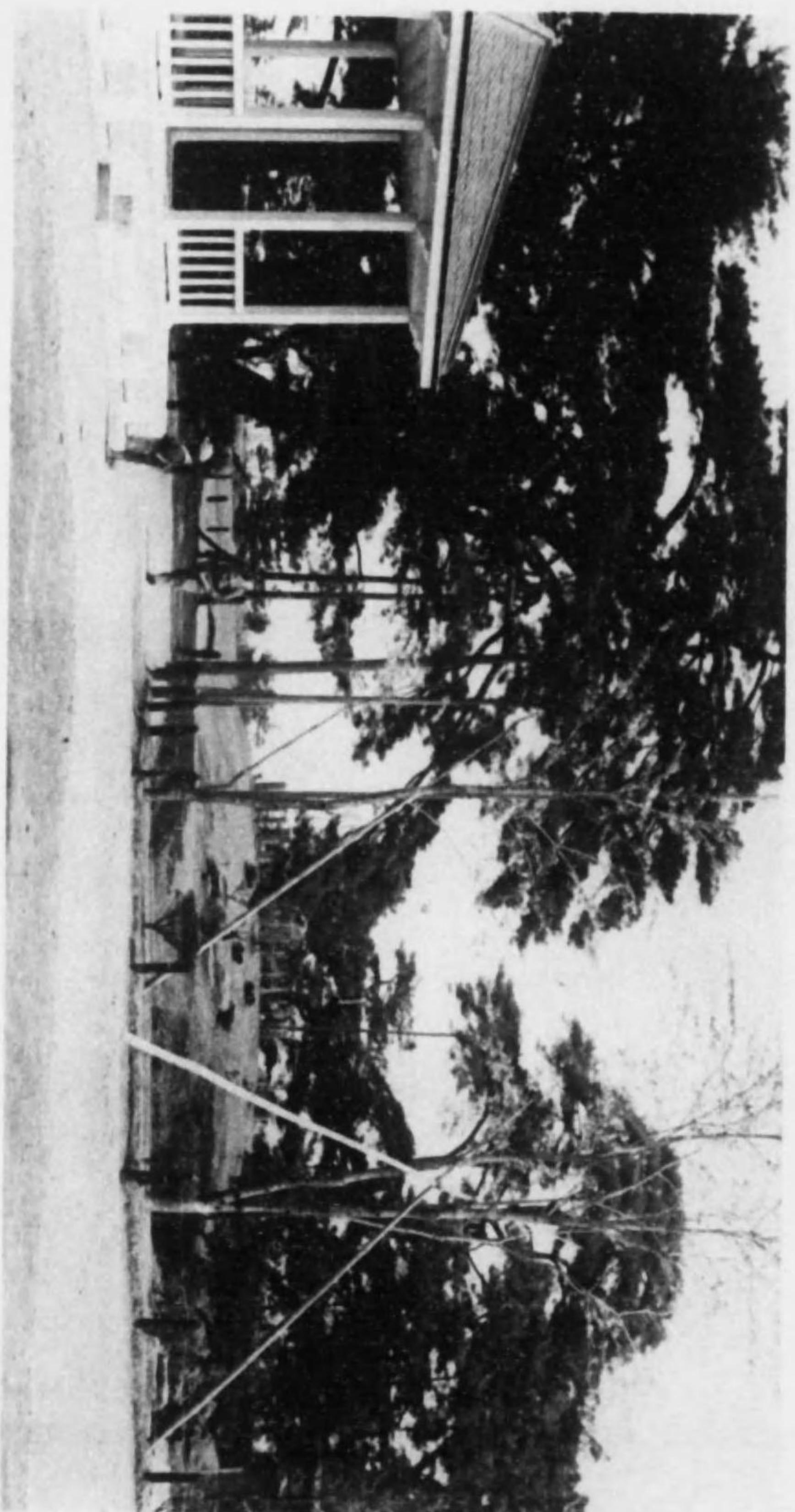
青海省廳前通



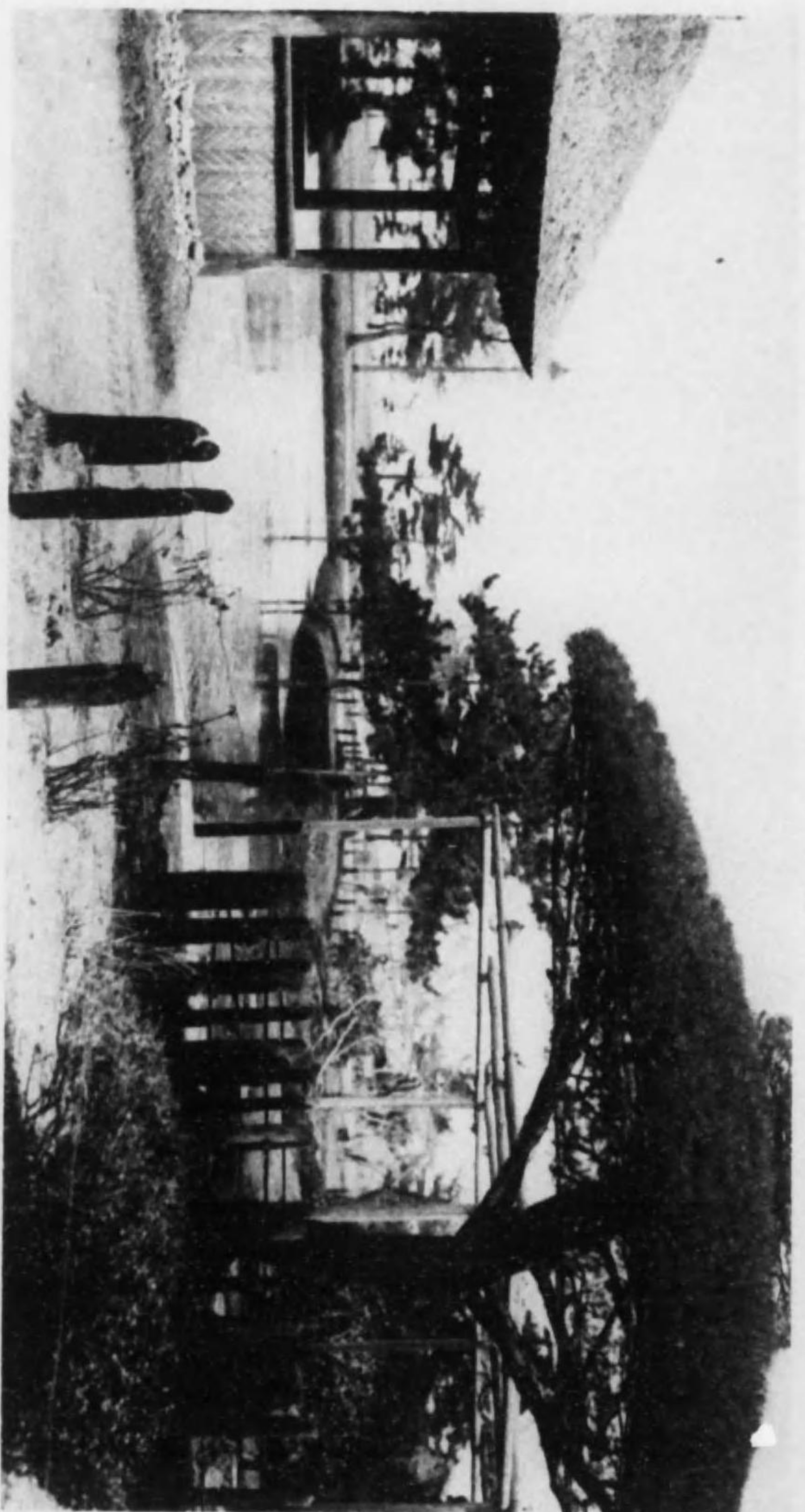
青森市新町通り



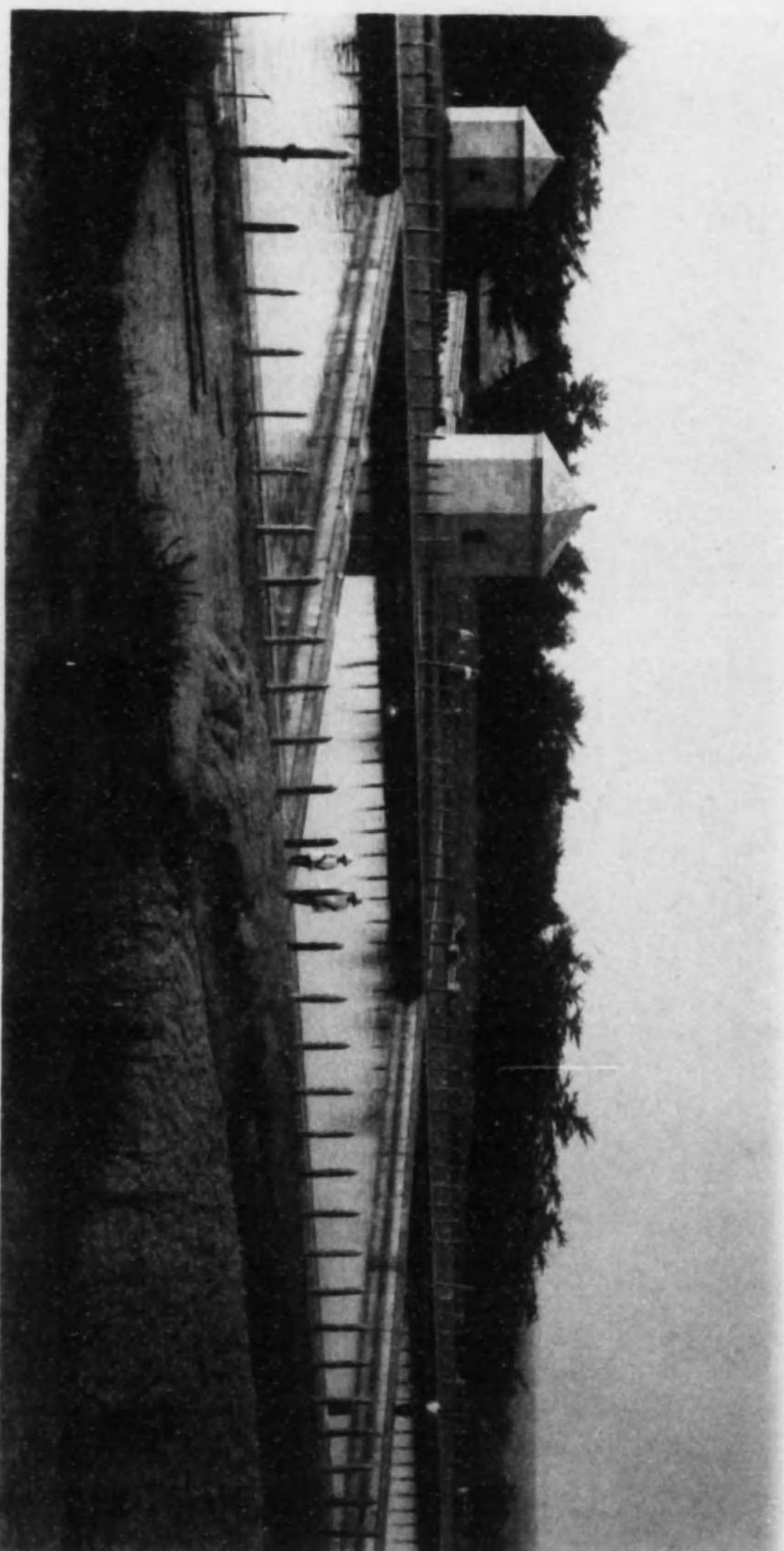
青森市堤川通



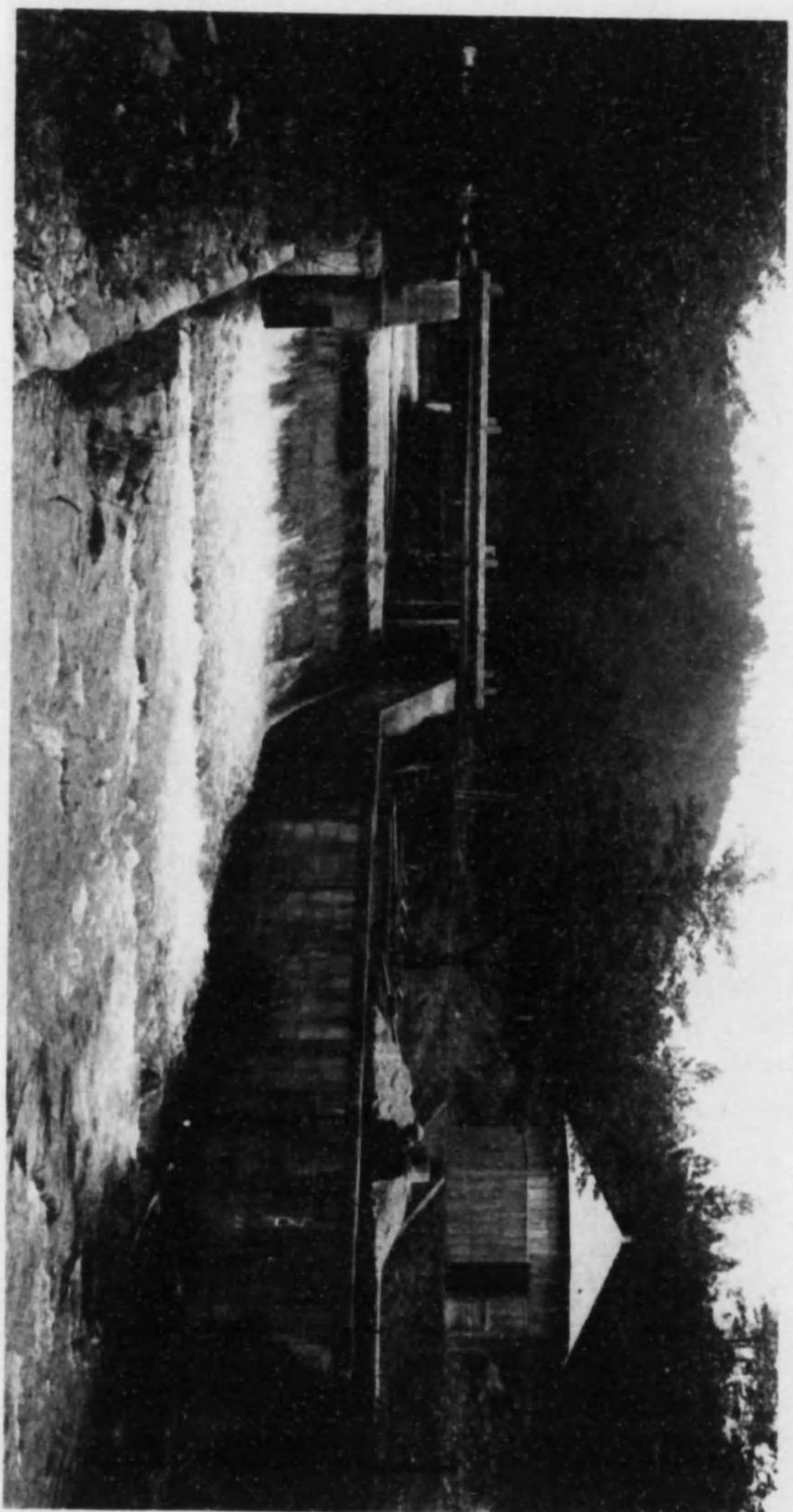
青森市合浦公園(其一)



青森市浦合公園(其二)



青森市水道水池



青森市水道入口

凡例

本書は青森市を広く紹介せんが爲めに編纂したるものなり

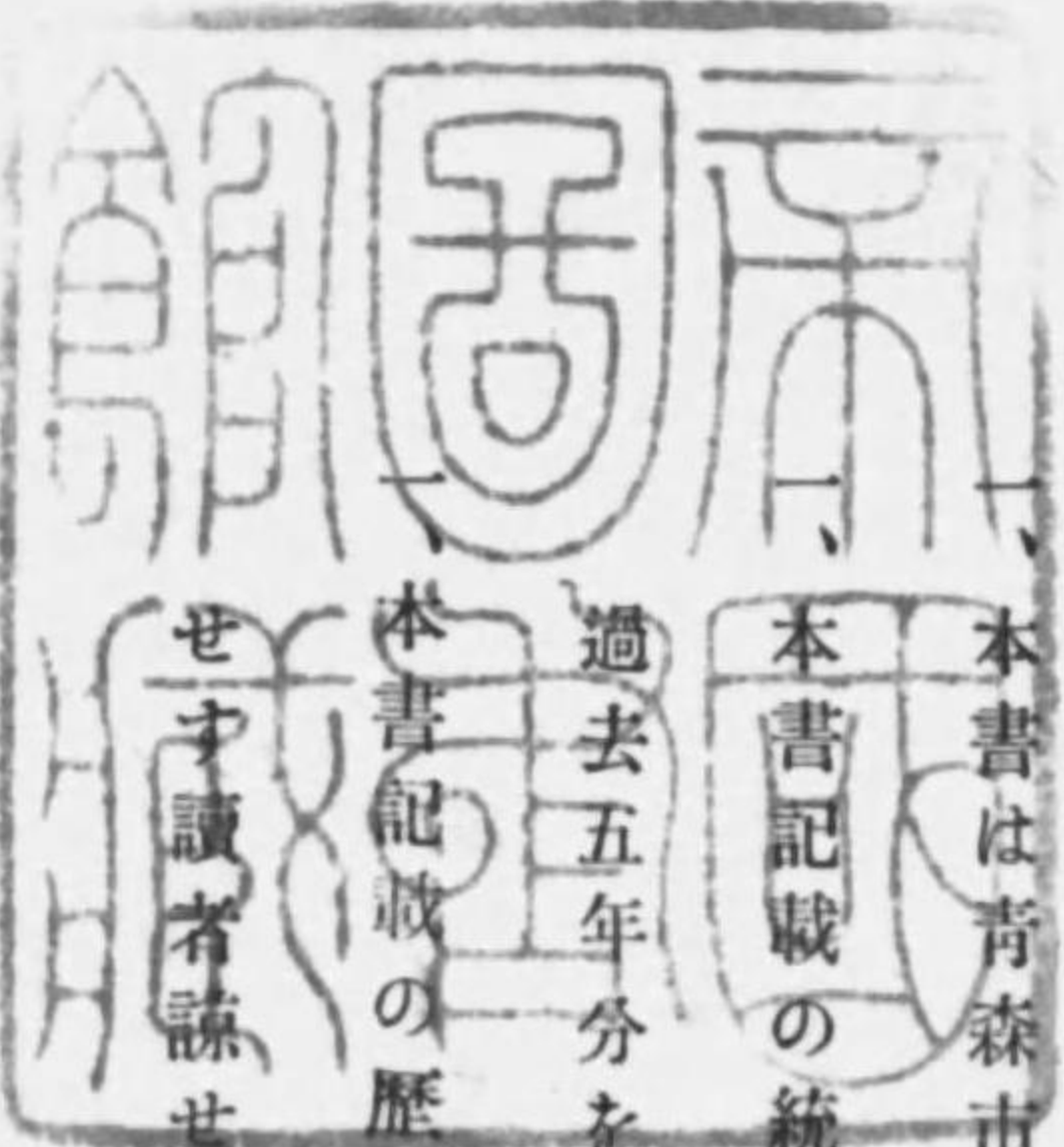
本書記載の統計は昭和三年のものに據る産業の變遷消長を比較對照の爲め

過去五年分を採録せり

本書記載の歴史的事項は二三の参考書に據りたるのみなれば遺漏
せし讀者諒せられんことを

昭和四年七月

編者識す



はしがき

青森は本州と北海道及樺太との聯絡地点で、南方に於ける關門と同く北方開發の大使命を有する重要港にして、何れの点から見ても東北に於ける隨一の雄港で有る。往年露國が、浦鹽との聯絡通商港として、此地に着眼したのも偶然で無いと思ふ。今春露國大使トロイヤノフスキ氏が來青の際、將來に於ても斯く有るべき可能性を有する事を暗に裏書した。北海道同様國費を投じて、早く築港を完成しなければならぬと思ふ。青森は新らしい發展地だけに、人口日増に殖へ、従つて勞働者も多いが、資本家との争も無く、至極圓滿で気分は頗る良い。諸方の人に接するが故に、市民は一般に交際に長けて居り、人情に暖みも有る。男子は東北人だけに少しく骨つほい所も有るが、婦人は極めて素直にして柔かい。概して發音は悪いが、方言に何共言へ

ぬ味が有る。地勢雄偉にして、南に八甲田の連山を負ひ、西には津輕富士の靈峰を仰ぎ、北には雄大なる陸奥灣を控へて、東の方遠く恐山を眺むるなど風景としても平凡では無い。山には香り高き鈴蘭有り、海清くして海水浴には絶好の地で有る。附近一体に温泉場多く、自動車を驅て三十分も飛せば有名なる淺虫温泉が有る。山水明媚、東北大學の臨海實驗所が設けられて居る此處の水族館は、八甲田山上酸湯の高山植物園と共に、山海の双壁として觀光客の珍とする所で有る。一夜泊りの探勝には天下の絶景十和田湖が有る。冬長く、雪は多いが、代りにスキーと云ふ痛快な運動が出来る。一步郊外に出づれば、滿目皚々、白絹を布きつめたる如き、雪の斜面に連續曲線を描き滑降する心地よさは何に譬へん様も無い。噫々美なる哉青森、楽しい哉青森予は青森市の謳歌者で有る。予は此地に市長たる事を最も愉快に思ふ。遠からず海に築港を完成したならば産業も自ら發展するで有るふ。陸に都市計劃

を實施したならば、市街の面目も一新するで有るふ。何時までも新開地氣分ではならない。市民が一致して大都市らしい風格を具ふる様に心懸けなければならぬ。夫れには、幸にも大官名士が夥しく此地を通過する。北極探險の偉人アムゼンも通るし、ソビエト政府の大使も通る。國際聯盟宣傳者も來るし、婦人参政權論者も來る。曰く政治家、曰く實業家、學者、思想家、文士、美術家等有らゆる方面の人々が、春より秋にかけて續々と此地を往來する。予は送迎の爲に殆んど寧日なしだ。忙かしいには忙かしいが非常に愉快だ。斯かる名士は何れも一種の特長を有し、一種の風格を具へて居る。是れ等の人物に接觸する樂みは何とも云へない。其處に刺戟が有り修養が有る之を他の人々にも分ち度いと思ふ故に、此地を通過する有ゆる名士に、乞ふて一場の講演を關門税として課し度いと思ふ。そして一般市民、特に青年學生に之を聽かせる様に仕度いと思ひ、且つ成るべく努めつゝある。之れ即ち

學校教育と異つた一種の活學問で有る。此社會教育に依て齎す所の結果は、
 聽て一般市民の智識の向上となり、人物の修養となり、自ら言語の矯正も出
 來、自ら市の風格を向上せしむる事が出来る。青森の前途や實に洋々として
 春海の如く希望に充ちて居る。重ねて云ふ。予は青森市の謳歌者で有る
 余は此地に市長たるを衷心から欣んで居る。そして永久に此地の住民たらん
 事を欲し、市民と共に専心大青森市の完成と市格の向上に努め、日夜市長の
 職にいそしんで居る。

近時視察或は觀光の爲に、青森へ來る人、青森を通過する人が著く殖へた。
 是等の人々の便宜の爲に青森の輪廓及其内容の大体を一目の下に看取し得る
 様に、市の案内と市勢要覽とを兼ねたる小冊子を編纂し、名づけて「青森」と
 したのである。

昭和四年八月

青森市長 中野 浩

あをもり

目次

總 説	
一、地勢……………	一
一、沿革……………	一
一、氣象……………	二
一、戸口……………	三
教 育	
一、學校の祖……………	五
一、青森縣師範學校……………	五
一、縣立青森中學校……………	六
一、縣立青森商業學校……………	六
一、青森縣女子師範學校……………	七
一、縣立青森高等女學校……………	八
一、私立協成高等女學校……………	八
一、市立工藝學校……………	九
一、市立女子實業學校……………	九
一、市立商工補習學校……………	一〇
一、農業補習學校……………	一〇
一、其他ノ學校……………	一〇

一、青年訓練所	一〇
一、師範學校附屬小學校	一一
一、市立各小學校	一二
一、幼稚園	一三
一、圖書館	一四
一、青森市簡易圖書館	一四
一、私立青森通俗圖書館	一四
一、日刊新聞	一五
衛生火防	
一、衛生	一七
一、水道	一七
一、火防	一八
社會事業	
一、日本赤十字社青森支部	二二
一、篤志看護婦人會	二三
一、愛國婦人會青森縣支部	二三
一、青森同情園	二三
一、青森保育院	二四
一、青森盲學校	二四
一、青森縣慈晃會	二五
一、青森市職業紹介所	二五
一、青森市方面委員	二七
一、公益市場	二七
一、市營住宅	二八
一、住宅組合	二八
一、青森健康保險署	二九

產業	
一、產業概要	三二
一、農業	三三
耕地面積及戶口—農產物—農家副業—農事に關する團体及其の施設	
一、畜産業	三四
家畜—畜產物—養鷄	
一、水産業	三七
現況—漁業種類—漁船—漁獲物	
一、水産製造業	四〇
現況—海參—乾鰻—蒲鉾及竹輪—漁肥—水産に關する團体	
一、工業	四五
一、商業	五七
現況—工業者數—工場—工產物—味噌—醬油—菓子類—罐詰類—麵類—木工品—履物—工業に關する施設	
一、組合及會社工場	六六

産業組合—重要物産—同業組合—
準則組合—會社工場

交通

一、道路……………	八五
一、鐵道……………	八五
一、市中交通……………	八六
一、通信……………	八六
一、青森築港……………	八六
一、海岸埋立……………	九〇
財 政	
一、市の公債……………	九二
一、市有財産……………	九三
一、市一部の財産……………	九三

雜

一、歳入歳出……………	九四
一、市内官公衙及團體所在地……………	
一、市中見物案内……………	九七
一、市中名所神社佛閣教會……………	一〇七
一、演劇及び活動……………	一一七
一、遊廓……………	一一七
一、旅館……………	一二七
一、料亭……………	一二八
一、湯屋及床屋……………	一二九
一、青森市附近の名所舊蹟……………	一三二

あなもり

總 說

一、地勢 青森市は本州東北の盡頭に位し東西二里一町二十六間南北十三町二十間面積三百三十五萬九千餘坪あり而して其の東西南の三方は田野を以て包圍せられ野内川、堤川、沖館川及新井田川の各流域相接し鐵路西南二十三哩餘にして津輕藩の舊城趾弘前あり東九哩餘にして淺虫の温泉あり北は陸奥灣の蒼波に臨み北海道函館市は海程僅に六十海里を隔つるに過ぎず街路平坦にして市中人家櫛比し殷賑にして商業最も盛なり

一、沿革 青森市は舊津輕藩の領地にして往時の世の所謂蝦夷外ヶ濱の一部落にして善知鳥村と稱し只僅かに西に安方東に覬貝の漁戸點在する一寒村に過ぎざりしが津輕藩主津輕信牧公寛永元年開港して青森と改稱せしに創まり爾來漸次發達し寛文十一年陣屋を設けられ明治四年

縣廳を此の地に置き二十四年東北本線鐵道開通し此所に東京、青森間の全通を見更らに同二十七年奥羽線開通して益々賑盛に向ひ三十一年には人口二萬八千人に達し船舶の出入一千八百四十隻其噸數九十五萬五千噸を算するの盛況を呈し此年市制を實施するに至れり三十七年には公衆電話を架設せられ同年水道布設の工を起して四十二年之が竣工を告げ同三十九年開港場に指定せらる同四十三年五月安方町より火を發し全市焦土と化したるも數年にして復興せり又一面交通運輸の増加發達に伴ひ港灣修築の必要急切なるものあるに至り遂に大正四年國庫の補助を受け縣費を以て工事に着手し約十ヶ年の長年月を費して大正十三年八月全く其の工を終れり同年同月羽越線の全通成るに及びて本市は之が起點として交通上重要な位置を占め更に最近北海道との連絡設備の完成と共に貨車航送を開始し交通史上一大革新を興へたり

一、氣象 本市は位置と地勢との關係上種々氣象に影響を受くる事あるも本縣東海岸地方の如く寒流の爲めに惡濕寒冷の東風を送られて農作物を犯さるゝが如き事極めて少く只冬季大陸高

氣壓の爲めに西北の寒風吹き荒び甚大の降雪を齎らし積雪は往々五尺を超へて交通に支障を來すことあり過去四十年間の氣象觀測成績に徴するに年平均氣溫は攝氏九度三毎目最高氣溫の平均は攝氏十三度七毎目最低氣溫の平均は攝氏五度四氣溫の最高極は攝氏三十六度〇最低極は攝氏零下十九度〇にして一月に尤も寒く八月に暑く快晴三十日降水日數は二百二十日にして其内降雪の日數は大半を占む風向は夏季南西の風を除けば春夏秋冬を通して偏西風卓越し平均風速は秒速三米にして全く強勢ならざるも時に秒速二十米以上に及ぶことあり

一、戸口 明治三十一年市制施行の當時は戸數六千七百七十七戸人口二萬八千七百八十人なりしも其の後本市商業殷賑を來すに従ひ他都市又は他府縣人の人込むもの多く昭和三年末に於ては戸數一萬五千二百五戸人口七萬八千九百八十二人となれり之を明治三十一年に比較するときは戸數に於ては九千〇二十八戸を増し二倍以上となり人口に於ても五萬二百二人を増し約三倍の増加を示せり最近五ヶ年間の戸口左の如し

年 別	現住戸数	現住人口
昭和三年	一五、三〇五戸	七、九八三人
全 元 年	一四、七三四	七、一七四
大正十四年	一三、七三五	六、〇九九
全 十三年	一三、三三四	六、九〇五
	二、九二一	五、二八七

現住戸数は前掲の如くなるが更らに之を職業別に現はすときは左表の通りにして商業の三千九百六十八戸を第一位とし次に工業の二千八百七十八戸を第二位とし農之れに次ぐ

年 別	農 業	工 業	商 業	漁 業	其 他	計
昭和三年	五二	二、八七六	三、九六八	一七〇	七、六七八	一五、三〇五
全 二 年	四九九	二、八五五	三、九七九	三四九	七、〇五三	一四、七三四
全 元 年	一九九	二、四八三	三、六二七	二九九	六、二二七	一二、七三五
大正十四年	一九三	二、九三五	三、七三四	二〇六	五、二六六	一二、三三四
全 十三年	二〇八	一、八五一	三、五九〇	三三一	六、〇四一	一二、九二一

教 育

一、學校の祖 青森に始めて忠孝の道を説きしは寶曆四年三月青森町奉行受拂者原田藤右衛門と云ふもの與力を以て所謂寺小屋を開きしを嚆矢とし次は寛政九年平尾八郎、村井新次郎の兩氏にして同十一年頃には手習師匠五軒ありし由なり其の後明治四年一月青森英學校と稱するものを寺町蓮心寺内に開き假りに學校として専ら英學の研究を始めしが年ならずして廢校となれりと云ふ以上何れも男子のみに限られたるも七月に至り寺町正覺寺を以て假小學校と定め男女に拘はらず六才以上のものに入學を許し授業を開始せしに依り從來の私塾は遂に廢止するに至り爾後幾多の變遷を経て遂に今日の隆昌を見るに至り現在では市内に縣立中等學校五、私立中學校二、市立實業學校一、補習學校四、小學校は師範附屬二、市立八校あり外に公私の幼稚園四ヶ所其他保育園一あり

一、青森縣師範學校 明治九年十一月小學師範學校と稱するものを青森に開きしが是れぞ今の縣

立師範學校の祖にして分校を弘前に設け本校は同一日より分校は同日より何れも召集開校するに至る而して明治十一年の頃縣立師範學校と改め今の縣立病院の所に宏壯なる校舎を建設し以て生徒の訓育に努めつゝありしに大正二年現在の浪打に移轉今日に及び目下學級數十四、教員二十九名、在校生徒第一部三百八十四名、第二部八十名、專攻科五十二名、合計五百十六名なり

一、縣立青森中學校 明治十一年一月師範學校内に中學科を設けしことありしが是れ本縣に於ける中學校の首めにて其の後同十七年八月縣立中學校を本市に設置せし所同二十二年に至り本市は教育地として不適なりとの無謀の理由の下に弘前に移轉せり然共社會の進歩は到底中學をも設置せざるを許さざる状態に立至り遂に同三十三年再び其の設置を見九月より開校するに至る現在の新町小學較々舎は即ち是れなり其の後明治四十五年現在の浪打公園地前へ移轉今日に及び目下學級數二十、教員三十五名、在校生徒九百六十九名の多きに上れり

一、縣立青森商業學校 明治三十八年四月本市に初めて商業補習學校なるものを開く是れ現商業學校の前身にして當時僅かに二十五名の生徒を有せりと云ふ其の後同四十年に至り市立商業學校と改め浦町に開校式を舉ぐ同十四年十二月に至り現在の浪打に移轉當時は修業年限三ヶ年なりしが其の後甲種五ヶ年の課程に擴張内容稍々充實せるも市の經營を以てしては完備を期し雖く縣へ移管の聲漸次昂まり遂に大正十五年四月縣立となり今日に及び目下學級數十五、教員二十七名、在校生徒七百十二名に上れり

一、青森縣女子師範學校 明治四十三年の創立にして高等女學校と併置四月を以て授業を開始せるも當時本縣は青森、弘前兩市二ツの普通高等女學校を以て縣下の女子高等教育を施し居るのみにして従つて本校の如きは常に生徒が充溢する筈なるも事實は然らず漸く募集人員に達するのみなりき然共社會の進歩に伴ひ追々女子の向學心も昂まり女子教育の必要をも感じて今日では毎年募集人員の約五倍の志望者あり年々第一部、第二部、專攻科を通して約百名の女教員を社會へ送りつゝあり目下學級數八、教員十七名、在校生徒第一部百九十四名、第二部五十二名、專攻科九名、合計二百五十名なり

一、縣立青森高等女學校 明治三十八年本市に高等女子教育機關なきを遺憾となし市内の有志相圖り時恰も日露戦後なるを以て戦捷記念として高等女學校の建設方を其の筋へ申請すると同時に同校敷地買収費の内へ金五千圓を本市より寄附することを決し直ちに請願の手續を爲し結果明治四十年より建築に着手同四十一年四月を以て落成を告げ開校するに至り年を経る事茲に二十有餘年に及び現在は十二學級編成にて教員十八名、在校生徒六百二十八名に上れり

一、私立協成高等女學校 一休女子は男子に比し其の生活狀態が學問技藝に關係淺き爲めか以前は高等女學校等に入學する者極めて少數にして地方富豪の女子にても高等小學校卒業程度にて満足する有様にして況や遠く家庭を離れて入學する等は絶無にして唯近郷の通學し得るもののみが入學する程度なりしが時代の推移は女子にも革命的變化を來し上級校へ入學志望の者年と共に急激なる増加を示し現在では縣下各女學校共其の四十%以内しか收容し得ず將來益々増加の趨勢に在るため此の狀勢を察知し當時縣社會教育主事たりし現校主熊谷氏は現職を抛ち有志の協賛を得入學緩和の一助として創設せられたるは即ち本校にて市内浪打にあり

大正十四年四月より開校せられて今日までに二回の卒業生を送れり現在八學々級編成で教員は囑託共十六名、在校生徒四百餘名にして尙ほ研究科も設けられてゐる

一、私立昭和女學校 昭和三年三月の創設にして本科四ヶ年、實科三ヶ年の制度なり然れども創立日尙淺き爲め生徒は目下三十二名あり職員は囑託共六名にして學校長は柿崎平藏氏なり以上は市内に於ける中等學校の概況なるが左に市立實業學校、補習學校並青年訓練所の現況を示さん

一、市立工藝學校 市内浦町に在り大正二年六月の創立にして修業年限三ヶ年で尋常小學校卒業のものに入學を許し現在百二十三名の生徒を收容し十二名の教員をして家具科、建具科、建築科の三科の指導に當らしめつゝあり

一、市立女子實業學校 市外大野村字金澤に在り明治三十七年四月の創立にして古川小學校に併置し修業年限四ヶ年なり而して尋常小學校卒業者は第一學年より高等小學校卒業者を第三學年より何れも入學を許し外に研究科も設けられ現在二百九名の生徒を收容し兼務共十一名の

教員を以て特に家事、裁縫の二科に重きを置き其の他女子の生活上必要な科目を選定し之れが訓育に従はしめつゝあり

一、市立商工補習學校 市内浦町に在り大正十一年四月の創立にて工藝學校に併置し修業年限四ヶ年の尋常小學校卒業者は第一學年より高小學校卒業者は第三學年より何れも入學を許し目下教員兼務共四名にて六十四名の生徒を收容し毎日午後六時より三時間づゝ將來の商工業者たるの教養に従事せしめつゝあり

一、農業補習學校 本市には沖館、造道二ヶ所にあり沖館農業補習學校は大正十年十月の創設、造道農業補習學校は大正五年九月の創設にかゝりいづれも小學校に併置さる生徒は六十六名にして職員十四名により補習教育に當らしむ

一、其の他の學校左の如し

中學校類似の學校 協成中學塾、青森夜間中學塾あり

協成中學塾は大正十四年十月の創設にして市内浪打にあり生徒百五十名にして塾長山内元八

氏なり

青森夜間中學塾は昭和三年四月の創設にして橋本小學校内にあり生徒九十四名にして塾長は青森縣學務部長なり

一、青年訓練所 目下本市には造道青年訓練所（補習學校充當）沖館青年訓練所（補習學校充當）新町青年訓練所、橋本青年訓練所の四ヶ所にて共に大正十五年七月の創立にして目下入所生二百十七名にして兼務並囑託合計四十二名の職員により銳意之れが訓育に努めつゝあり

其の他小學校は師範附屬二校、市立八校、外に幼稚園ありて教育機關は稍々完備す今左に各小學校の状況の一斑を示さん

一、師範學校附屬小學校 男子師範附屬小學校は明治十二年二月の創立にして當時は生徒十名を限り入學を許可せりと爾後漸次擴張して今日に及びしが現在は尋常科より高等科三年までの設備ありて男女に限らず收容せり

女子師範附屬小學校は大正三年の創立にして尋常科より高等科二年までの設備あり高等科に

限り女子のみを收容せり

一、市立各小學校 市の經營に係る小學校は沖館尋常小學校の明治九年七月を筆頭に浦町尋常高等小學校の明治二十一年一月、橋本尋常小學校の明治廿五年五月、造道尋常小學校の明治廿六年七月、新町尋常小學校の明治卅四年四月、長島尋常小學校の明治卅六年五月、真町尋常高等小學校の大正十一年四月、古川尋常高等小學校の大正十五年四月創立の以上八校にして往時に於て明治四十三年の大火災並大正二年の當地方未曾有の凶作等に遭遇せるを以て一時教育上惡影響を蒙りたるも市當局並各教員の努力と一般慈善者の恩恵に依り漸次舊に復し現在では尋常科學級數百六十八、教員百九十二名、在校兒童一萬二百四十一名、高等科學級數二十八、教員三十名、在校兒童六百七十三名、兒童合計一萬九百十四名の多きに上り諸設備又完備し能く兒童の訓育に従事しつゝあり今亦御大典記念事業として市内浪打舊練兵場跡地に浪打尋常高等小學校を建築中にして竣成の曉は市東部の一偉觀たらん

學校數	學級數	教員數	在校兒童數		一學級平均 兒童數
			男	女	
市立八	尋常 一六八 高等 二八	一九三 三〇	五、〇八九 三六三	五、一五三 三三〇	一〇、三四一 六七三
縣立二	尋常 一六 高等 六	一六 九	一七三 一三六	四七三 一三七	六四五 二六三
計一〇	尋常 一八四 高等 三四	二〇八 三元	五、三六三 四八九	五、六三四 四四七	一〇、八八六 九三六
合計	二二八	三四七	五、七五二	六、〇七一	一一、八三三

一、幼稚園 公立には女子師範附屬幼稚園あり私立には青森幼稚園、聖マリヤ遊戲會、日本基督青森幼稚園ありて共に收容稚兒も多く設備また完備して何れも好成績を擧げ居れり又社會事業の一つとして青森保育院は設けられ主として勞働階級の托兒を爲し好評を博しつゝあり

園數	保母數	收容幼兒數		計
		男	女	
公立	一	三三	三三	六六
私立	四	一九〇	一六五	三五五
計	五	二二四	一九七	四三一

一、圖書館 縣立青森圖書館は市内新町に在り昭和三年青森市より移管九月一日より開館せらる蔵書一萬四千百有余冊の多きに上り設備萬端完備せらる創業日淺けれど現在は一般によく利用せられ更に日を追て發展の機運に向ひつゝあり

一、青森市立簡易圖書館 大正四年市立圖書館として市外大野村神部支署内に開館せられ當時唯一の公立圖書館として閱覽者多數に上り追て内容の充實するに伴ひ廳舎又狹隘を告げ遂に大正十四年六月現在の橋本校裏手へ移轉工藝學校に併置せらる昭和三年縣へ移管後は名稱を簡易圖書館と改め蔵書鈔きも閱覽者數鈔からず

一、私立青森通俗圖書館 市内寺町に在り大正七年七月の創立にして一戸岳逸氏の經營なり蔵書

の數及閱覽者は前兩者を凌ぐ

一、日刊新聞 市内日刊新聞は東奥日報、青森日報、青森報知新聞の三にして東奥日報及青森日報の兩社は創業年月古く各一萬三千號を突破し何れも八頁を刊行し（後者は都合上目下四頁なり）公平穩健にして報道の迅速正確なるため地方の信用厚く發行部數も亦地方新聞として他に勝るものあり青森報知は昭和二年四月の創立にて日尙淺きにも拘はらず内容堅實にして一般の氣受けよく益々發展の機運に向ひつゝあり

衛生、火防

一、衛生 本市の衛生状態は縣の首都として縣立青森病院の設置され居るため極めて良好に行はれ居り同院には目下醫師二十名、藥劑師七名ありて各科の設備殆ど完備し私立にありては神病院を筆頭に長尾病院、高橋病院、竹浪病院等何れも相當設備の下に各々其の機能を發揮し又市内開業醫師は三十余名に達し最新の學理を應用して遺憾なきを期し居れり而して市の傳染病院は沖館に在り外に市内私立病院にも收容所ありて萬一に備ふ、道路下水及汚物の掃除は五名の巡視監督の下に常置工夫五名、名置運搬馬車十七臺ありて汚泥の棄却、道路下水の掃除に従がはしめ其他蠅族の驅除、撒水の設備等完備し概して市の衛生状態は良好なるも市の場末に於て下水の不完全なると地域平坦の爲め排水の充分ならざるを遺憾とす

一、水道 由來青森市は海拔三米から六米の低地で井を堀つても飲料水を得難く大方は多量の有機物を含み飲料に適せず従つて水道布設は市民多年の希望なりしが遂に明治四十年工費八十

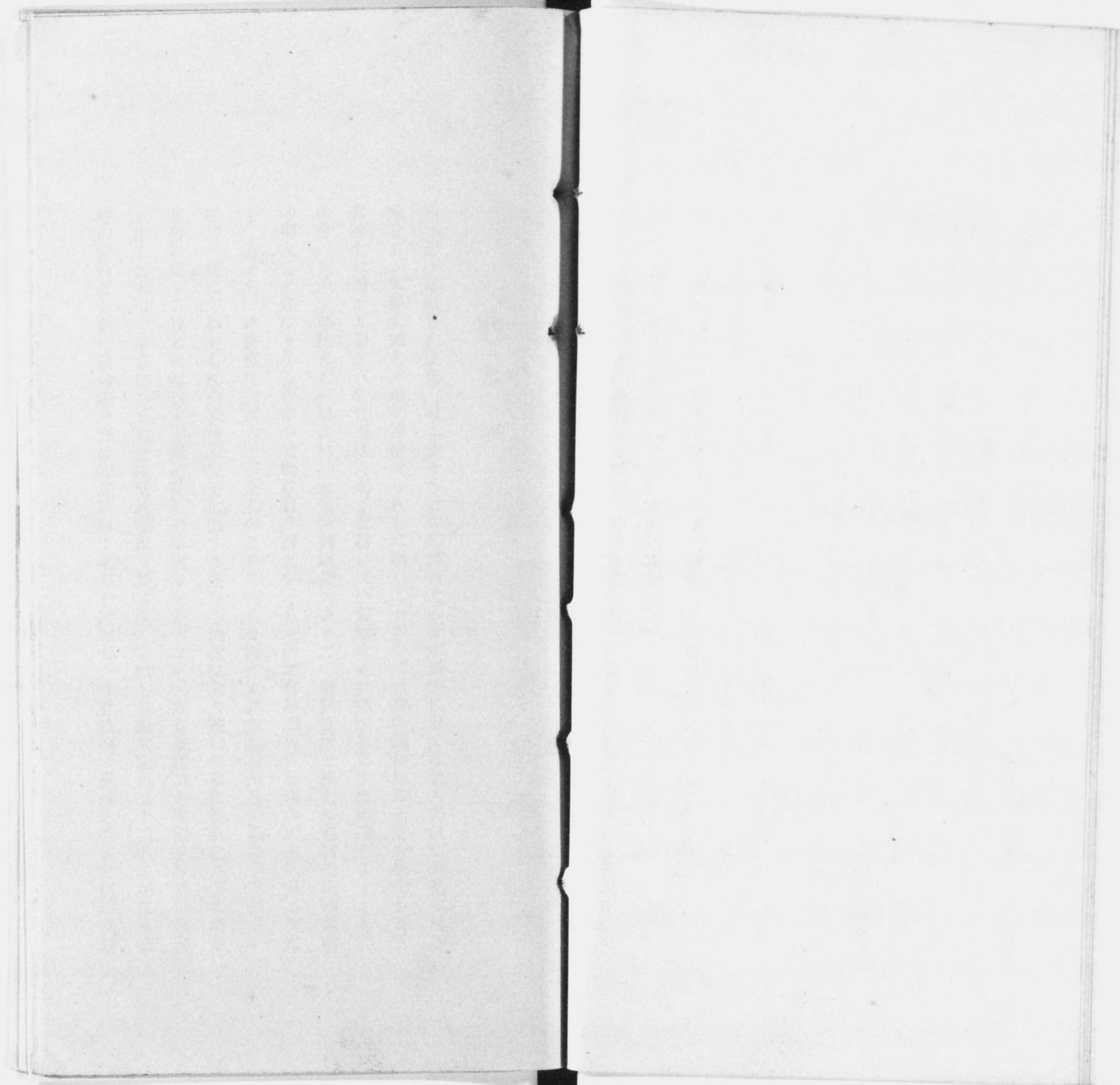
余萬圓を以て工を起し同四十二年之れが竣成を告ぐ水源は八甲田に源を發する横内川上流で分水採入所は東郡横内村に在り市を離る約三里の地点である尙水質の良好なること全國でも有名なるが近來人口の増殖に伴ひ給水戸數亦著しく増加し夏季旱魃の時季には配水上一入困難を感じ應々制限給水の非常手段に依らざるべからず斯くては市民の受くる不便不利は勿論遂ては保健衛生上にも悪影響を及ぼすを以て昨年より三ヶ年繼續事業として新に貯水池築造に着手し之れが竣工の曉は市民の享くる利便大なるものあらん今左に三年末現在の概況を示さん

水管延長	給水栓	消火栓	給水總量	給水戸數
七、八三米	六、六九	四七七	二、九八、〇七〇立方米	一四、三七戸

一、火防 明治四十三年の大火災後は市内に二大防火線を設け又縣令にて家屋建築制限を規定し毎戸の間必ず三尺の間隔を置き屋上は不燃質物を物ゆる事とせり、一方消防設備の完成を期し目下六部編制の常備消防手四十四名、豫備消防手二百五十五名、計二百九十九名の多數に

上れり警鐘樓二ヶ所常備消防屯所二ヶ所外に器具置場等設備は萬事整ひ有事に備ふ加ふるに水利の便ある爲め大火に至ること稀なり左に器具の概要を示さん

自動車ポンプ	蒸氣ポンプ	水管自動車	腕用ポンプ	分水管者
五臺	二臺	一臺	三臺	一九臺



社會事業

一、日本赤十字社青森支部 日本赤十字社の起源及之れが事業等に就ては世人の既に知悉し居る處なるが本縣支部を本市に設置せられしは明治二十年十二月時の鍋島知事を青森縣委員長となせしに始まり同廿六年青森縣支部と改稱し其の當時は社員僅かに二千余に過ぎざりしも其の後二回の支部總會と三回の特別社員章御親授式ありて 總裁宮殿下親しく臺臨社業御獎勵の御諭旨を賜はりたる等今や特別社員八百九十一名（内佩有功章者六十四名）正社員二萬五千二百余名、總數實に二萬六千百余名の多きに達せり而して其の事業たるや戰時、災害、平時の三種に分類せられ内戰時及災害に關する幾多の治績は世人周知の事に屬し之れ等戰時並災害に處する爲めには自ら平素に於ての準備なかるべからず蓋し救護員の養成と材料の準備とは本社本來の事業にして目下配當救護班三個は漸く完成し各班共定員三十四名で何れも戰時の要員なり更に豫備班一個の編制に目下全力を傾注し一方看護婦の養成と共に材料の整備

に努めつゝあり翻つて歐洲大戰後世界の形勢一變致し五大列強の間に將來戦争又は之れ等開
争防止説提唱せられて茲に國際聯盟の成立を見更に赤十字聯盟となり人類共存共榮の爲めに
其の信條を「健康の増進、疾病の豫防、苦痛の軽減」に措き各國共之れが普及と遂行とに全
力を傾注することゝなれり従つて青森支部も本社の意を体し此の信條に基き平時事業として
保健衛生上の見地より結核防滅救急函の配置、妊産婦の保護、夏季兒童保養所、少年赤十字
團の設置、學校看護婦の派遣等社會的施設として何れも相當の成績を挙げつゝあり尙支部財
政の許し範圍に於て將來益々擴張の趣にて地方の受くる利便大なるものあらん

一、篤志看護婦人會 日本赤十字社員中より成る婦人團體を篤志看護婦人會と稱す支部所在地に
は支會を設け上には總裁宮殿下を戴き看護學を講習して一般衛生思想の普及に努め更に本社
看護婦の養成と戦時救護に資したること尠からず本縣には本市に支會ありて知事夫人會長と
なり弘前、八戸の兩市に分會を置き全會員三百余名に上れり

一、愛國婦人會青森縣支部 愛國婦人會は奥村五百子女史の主唱に依り明治卅四年三月二日の創

設にして其の當時唯一の目的たる軍人遺族並廢兵の救護慰安にして尙一般窮民救護にも従事
せり本縣支部を市本に設置せられしは明治卅六年三月にて時の山内知事夫人を青森支部幹事
長となせしに始まり全年十二月支部長と改稱し愈々會旨の普及、會務の擴充に努め先づ明治
卅八年支部第一回總會を開き引續き全四十二年 總裁宮殿下の臺臨を仰ぎ第二回總會を開き
し當時は約四千余の會員を擁するに至れり其の後支部幹部の撓まざる努力に依り漸次擴張せ
られ現在では會員實に二萬有余名の多數に上れり而して其の事業たるや愛人會本來の目的た
る諸施設の外近時社會の風潮に順應し妊産婦救護、農村託兒所等社會的事業を試み専ら之れ
が充實と普及を計り更に兒童健康相談所を設けて婦人衛生及育兒上の衛生思想の向上を圖り
以て兒童の健康を増進せしめ様と夫々計畫中にして將來益々多事ならんとす

一、青森同情園 明治卅三年五月八日の創立にして現在は市内浪打にあり初め青森慈善院と稱し
無告の孤兒、棄兒及貧兒を養育し兼ねて貧困にして學費無き者を教育し自活の途を得せしむ
る目的を以て市内古川に設立され全卅八年兒童全部を市内小學校に入學せしめ院内に於ける

教育を廢し大正十年二月青森同情園と改稱し新に一棟を建築して治療部を設け貧困の爲め醫療を受くる途なきもの及行旅病人を救護し同十三年五月増築擴張を加へ醫師なき地方の病人にして窮迫の者に無料宿泊診療を得せしめ以て今日に至る、現在收容兒三十名を有し患者四名産婦二名を收容し凡て院主家族と同一の取扱を爲し小學校に通學せしめ卒業者には適當の職業を撰擇し徒弟として商工業者に委嘱し本人の向上發達に留意してゐる

一、青森保育院 大正九年十二月勞働者又は小賣商人の兒童を委託に依り保育する目的を以て青森警察署人事相談所に於て有志者の寄附金に依つて設立を見、全十年二月之れを青森縣共濟會青森支部に引繼ぎ現在三才以上六才未満の兒童六十三名を收容し常に家庭と連絡を執り保育に専心しつゝあり

一、青森盲學校 現校主西連寺幸三郎氏地方盲人の多數なるに教育機關無きを痛感し奮然身を挺して盲兒教育事業に當らんことを決意し大正十四年十月十五日有志の協賛を得て市内浦町字橋本に本校を創設し青森盲學校維持會經營主体となり銳意事業の完成に任じてゐる、編制は

初等科六ヶ年にして普通學を、研究科は四ヶ年にして鍼灸、灸、マッサージを施し現在校長一人の外教員一名之れが訓育に當り生徒は初等科十一名、研究科十名を收容せり

一、青森縣慈晃會 弘前市曹洞宗宗徳寺住職棟方唯一氏の主唱に依り明治卅一年五月三十日免囚保護會を創立し佛教慈晃會と稱して以來幾多の變遷を経て昭和二年七月十六日財團法人組織の認可を受け青森縣慈晃會と改稱し本市に本部を置き弘前及本市浪打に支部を設け有志の寄附金により之れを經營し刑務所よりの釋放者及起訴猶豫者又は執行猶豫者に對し直接間接若くは一時的の保護を加へ來りしが其の成績頗る良好なりき現在本市浪打支部には七名を收容し保護を加へつゝあり

一、青森市職業紹介所 大正十四年五月職業紹介法により市營職業紹介所が設置せられ最初は市役所内の一室に於て執務致せしが言はゞ未だ幼年時代とも云ふべく其の事業も一般社會の理解乃至期待が充分ならざりし爲め利用も微々たりしが其の後時日の經過するに従ひ只單に救濟事業のみでなく社會的にも産業的にも極めて重要な意義を有する事業たることが一般に

て解せられ其の内連絡職業紹介所に指定せられて利用も益々盛んとなり役所内の一室にては
 狭隘なる爲め前の空地に新事務所の築造に着手し昨年六月其の竣工を見直に移轉執務する事
 に成り現在は所長の外二名の事務員を配置し普通の職業紹介の外少年の職業指導及紹介並就
 職者にして不幸保證人の無い氣毒なる方々の爲めに信用保險制度の實施等不遇の者へ自活の
 途を得せしむべく所長以下懸命に奮闘致し居れり尙近き將來に於て法律顧問として専門家を
 囑託し職業に關する法律の相談は勿論家庭上の問題乃至は貸借關係等の事柄まで人事百般の
 相談に應ずる計畫等ありて時代の要望に副ふ様斯業の發展に盡瘁しつゝあり
 左に開所以來の取扱事項及昭和三年中取扱ひたる件數を示さん

開所以來の取扱件數	
求人數	就職者數
一〇、三九五	二、五七〇人
四、八三元	三、五八七
昭和三年中の取扱件數	三三四
一、三九九	七二六
	三三二

一、青森市方面委員 時世の推移に伴ひ方面委員設置の必要を認め昭和二年十一月本市に始めて
 其の創設を見現在十一名の委員を囑託配置し防貧救貧並社會の壓迫等に依り不幸の境遇に在
 る者に自活の途を講ぜしむべく援助誘導し傍ら有志の寄附を募りて貧困者に施與するの外市
 醫師會と連絡を採り醫療を受くる途無き者へ無料診斷券の交付或は電燈料免除の交渉等一身
 に引受けて奮闘しつゝあり今亦三名増員配置の計畫ありて將來市内貧困者の受くる利益大な
 るものあらん

一、公益市場 市營公益市場廢止後は青森市農會並東郡農會共同主催の下に青物市場が開設せら
 れ毎年七月中旬より十一月下旬迄の期日中市内の要所柳町道り並鹽町防火線通りの二ヶ所交
 互に開き市内及近接町村の生産者を無料入場せしめて清新にして低廉なる野菜を供給し良好
 の成績を挙げつゝあり左に昨年中に於ける成績を示さん

開設日數	一五〇	出場延人員(生産者)	二八、一三四	總賣上高	一五、三〇〇圓	一日平均	六二五圓
		一日平均	一七				

一、市營住宅 青森市營住宅は大正九年十二月の創設にして所謂好景氣時代に住宅緩和策として建設せられたるものにして現在は十四棟の建坪五百四十七坪、四十九戸分にして目下利用者四十九名あり大方は俸給生活者にて家賃一ヶ月分最高十五圓最低七圓なり

一、住宅組合 住宅組合の始めて本市に設立を見たるは大正十一年三月にして青森大林區署住宅組合と稱し事務所を市内沖館に置き六萬圓の資金を以て二十八戸建築せり其の後長足の發展を遂げ現在では二十三組合、資金四十四萬四百圓、戸數二百三十一戸の多きに上れり
茲に大正十一年以來の成績を上ぐれば左の如し

年次	組合數	資金	戸數
大正十一年	一	六〇、〇〇〇圓	六
大正十二年	八	一三六、九〇〇	七〇
大正十三年	五	八〇、〇〇〇	四六
大正十四年	一	—	一
昭和元年	三	三九、五〇〇	四

昭和二年	三	六〇、〇〇〇	三
昭和三年	三	六四、〇〇〇	三
合計	三三	四四〇、四〇〇	三三一

一、青森健康保險署 近時社會問題として最も重要なものは云ふ迄もなく勞働問題にして換言すれば勞働者對資本家間の問題なり就ては此の關係を如何にせば最も合理的且つ圓滿に解決し得るかと云ふ事が今日の國家社會の重要な問題の一つにして而し乍ら未來永久に利害の衝突を除去するが如き根本策を發見する事が不可能なるも此の機會を成るべく少くし其の争を極端に陥らしめず之れを適當に緩和し社會全体をして危機に陥らしめざるが如き方法を講ずる事が最も肝要にして此の健康保險署の設置も亦其の解決策若くは緩和策の一助として相當有益なる機關たるは勿論にして幸ひ本市に其の設立を見濱町に事務所在りて去る大正十五年十月一日より縣内一班を統轄し銳意斯業の發展向上に努め相當の成績を擧げつゝあるも充分なる機能の發揮は將來に屬さん現在に於ける狀況は左の如し

	該當工場數	被保險者數	保險料徵收額	保險給付金 支給人員	同上金額
總數	二四	三、四五〇	五、八八圓	一、〇六一	一七、三〇三圓
内青森市	五〇	一、二四六	三、五六七	八四八	七、二六〇

産 業

一、産業概要 本市の地たる區域狭少にして東、西、南の三方は山に圍まれ北方海に面したる平地の一小部分に過ぎず加ふるに地質瘠薄にあらざるも農業の適地極めて尠し殊に本市は北海道へ渡航の要津に當るを以て多くは商業を主とし工業之れに次く最近の生産額は七百八十三萬八千七百七十九圓にして之れを十年前に比するときは約三倍の増加にして今後社會の進運に伴ひ益々發展すへきは疑を容れざる處なり今最近五ヶ年間に於ける生産額の趨勢を示せば左の如し

年 別	農 産	水 産	工 産	畜 産	鑛 産	計
昭和三年	三三八、六八一 <small>圓</small>	一〇九、六九七 <small>圓</small>	七、三三九、三三七 <small>圓</small>	二四七、四二四 <small>圓</small>	一三、〇六〇 <small>圓</small>	七、八三八、一七九 <small>圓</small>
全 二年	三三二、六三七	一二、九六五	七、〇四六、三三三	三三二、〇七一	一〇、三四〇	七、六三二、三四五
全 元年	九七、八五〇	四、三七九	六、四八八、一九〇	三二、四五五	一一、九六〇	六、八六三、七三四
大正十四年	二二、七〇七	三四、三三三	五、〇八九、〇八六	三四七、六三二	—	五、四八二、七三七

全 十三年 一〇九、三五四 三、三四一 四、七三三、七六六 三五九、三四八 一 五、一三三、七〇九

農 業

一、耕地面積及戸口 本市の農業は地勢の関係上商業工業の發達と共に年々減少しつゝありたるが昭和二年四月郡市併合に依り農家現住戸數五百一十一戸に増加し従業人員一千四百七十五人となりたるも之を總現住戸數及人口に比較するときは眞に微々たるものなり耕地は田三百四十四町六反歩、畑七十四町三反歩、合計三百八十八町九反歩にして之れを従業人員に割當つるときは一人平均二反歩餘に過ぎず

一、農産物 本市の農産物としては米、馬鈴薯其他野菜類に過ぎず而して其産額は最近の統計に依れば二十三萬八千七百八十一圓なり之れを細別すれば左の如し

種 別	昭和三年	全一二年	全元年	大正十四年	全十三年
米	一六三、八三圓	一五七、八六圓	六九、七六圓	八二、三四圓	九〇、三八圓
大豆	三六	六八四	一八〇	六二六	三六六

小豆	三元	一〇三	—	—	三五
蘿蔔	九、六〇八	七、二五	四、八〇〇	五、四〇〇	五、三五〇
漬菜	二八、六〇〇	一〇、三三四	七、八二〇	四、六九八	一、四一〇
茄 薯	一三、八〇〇	一三、五六六	二、〇七四	三、四五〇	一、二二五
馬鈴薯	四、七五三	四、三〇〇	三、四二二	六、九八四	三、八七六
長 芋	二、三四〇	二、七〇〇	一、九六六	三、一〇〇	七三〇
其 他	一六、三五二	二二、一六五	七、八〇〇	八、一三五	六、〇五九
計	三三六、七八一	二二八、九九八	九七、八五〇	一一一、七〇七	一〇九、三五四

一、農家副業 本市農家の副業としては薬工品を最たるものとするも稻作の豊富ならざる關係上他郡市に及はざること數等なり此の外養雞、養豚、草履、下駄表、竹細工等の作業に従事するもの多少なきにあらざるも未だ充分の産額に上らざるを遺憾とす

一、農事に關する團体及其の施設 青森市農會は明治三十五年の創立に係り農事の研究調査並に農業上に關する指導獎勵を爲し來れり從來實施したる事業中主なるもの左の如し

自家用採種田設置の奨励、蔬菜速成栽培の奨励、蔬菜市場の設置、馬鈴薯の萎縮病豫防、採種畑の設置、稻作立毛品評會及蔬菜立毛品評會の開催、農作物病虫害驅除豫防劑實地指導、正條植勵行

畜産業

一、家畜 本市の家畜は牛、馬、豚の三種にして牛匹は大概ね搾乳用なり馬匹は多くは挽馬にして特に農業用として飼養するもの尠なし豚は食用として飼育せらる今最近五ヶ年の比較を舉ぐれば左の如し

種別	昭和三年		全二年		全元年		大正十四年		全十三年	
	牛	計	牛	計	牛	計	牛	計	牛	計
牛	四頭	六	四頭	三	五頭	四	三頭	四	四頭	四
馬	四頭	六	三頭	三	四頭	四	三頭	四	四頭	四
豚	五頭	六	三頭	三	五頭	四	三頭	四	四頭	四

一、畜産物 本市の畜産額は年々増加の趨勢にあり就中屠肉にありては近來肉食の向上せる結果として著しき増加を見るに至れり之れに次いで牛乳及鶏卵の需用甚た多く共に畜産額の主たるものなり今各種の産額に付き五ヶ年間の比較を舉ぐれば左の如し

種別	昭和三年		全二年		全元年		大正十四年		全十三年	
	馬	計	馬	計	馬	計	馬	計	馬	計
馬	一、二〇圓	一	七三〇圓	一	五〇〇圓	一	一、〇三五圓	一	九六五圓	一
豚	四、五六八	一	四、六三三	一	一、八七〇	一	一、九六九	一	七、六三〇	一
鶏	六、四六八	一	五、五六三	一	五、五六三	一	三、〇〇五	一	三、〇八〇	一

鶏卵	二八、八二四	二七、七七七	二七、七七七	一七、五八四	一六、五二三
兔乳	二九五	四三二	二五〇	—	—
牛乳	三三、四〇〇	三一、五三〇	一七、六八〇	三六、一六〇	二六、三三五
養蜂	三六〇	六〇	二三八	三三三	三五七
屠肉	一六五、六三三	一五三、〇〇九	五九、二八五	一七九、〇七四	一九四、九〇六
生皮	七、七七七	七、三三九	八、三三三	八、三三三	九、四一七
計	二四七、四四四	二三一、〇二一	三三一、四五五	二四七、六三一	二五九、三四八

一、養鶏 農家の副業として頗る有利の業とす即ち資本を要すること極めて少く其飼育も亦甚た容易なるを以て之を普及せしむること難事にあらず而して鶏及卵の需要は至る處甚た大なるを以て決して販路に苦むの憂なし故に養鶏は最も安全にして且つ有利の事業なれば將來大に發展の望あるものとす最近の統計に依れば本市に於ける鶏數及生卵數左の如し

年別	飼養戸數	羽數	羽數價額	生卵數	生卵價額
昭和三年	一、〇六八戸	二六、一八九	一七、七四圓	六九四、五二	二七、七八圓

全 二年	一、〇九三	一六、九九三	六、四六三	七二七、〇三三	二八、八二四
全 元年	九九〇	一一、三八九	五、五八三	四三三、七七	二七、七七
大正十四年	九三七	一一、一〇四	—	三三三、二五〇	一七、五八四
全 十三年	七七三	九、四六六	—	二七三、五八八	一六、五二三

(備考) 青森種鶏場の分は調査せず

水産業

一、現況 本市の漁場は地勢上沿岸近く來る暖流漁場にして専ら暖流魚族を主とし沿岸漁業に従事するものなるか漁場は商港として多數の船舶出入する青森灣内にある爲め商船出入の頻繁なるに従ひ魚族の棲息を妨ぐるの關係上漁獲物を減少し従業者も年々減するの傾きあるは遺憾とするところなり今最近五ヶ年間の漁戸及漁業者を表示すれば左の如し

年別	本業	副業	計			
	戸數	人員	戸數	人員	戸數	人員
昭和三年	一七〇	二五七	五	四五	三六	三〇三

一、漁業種類 本市の漁業は手繰網、流網を使用するもの最も多く中には猪口網、桁網、汽船手繰網等を使用するものあり即ち左表の如し

種別	昭和三年	全二年	全元年	大正十四年	全十三年
猪口網	三	九	九	九	九
汽船手繰網	一	五	五	五	七
手繰網	四〇	七〇	三九	四一	三六
流網	一四	二四	三六	三七	三一
地引網	三	三	一	二	三
桁網	三	三	九	九	〇
計	二〇	一三	一〇	一〇	六

一、漁船 従業者の所有する漁船左の如し

種別	昭和三年	全二年	全元年	大正十四年	全十三年
二間未満	一	一	一	一	一
三間未満	四	六	三	二	一
五間未満	九〇	八三	三三	三七	三六
五間以上	四	八	五	六	四
計	九八	九八	四〇	四七	四二

一、漁獲物 本市漁場の漁獲は鱈、鯖、鰯、鰯、鰯、鳥貝、ほや等にして鱈、鰯は其の最たるもの

のとす特に輓近大羽鱈の日本海沿岸より津輕海峡を経て陸奥灣内に回游し更に太平洋方面に向ふもの漁獲せらるゝに至りたるため一層其の漁獲を増すに至れり最近五ヶ年の漁獲高を示せば左表の如し

種別	昭和三年	全二年	全元年	大正十四年	全十三年
鱈	七三、〇六圓	四、一四圓	二四、〇三圓	一〇、九五圓	七、七〇圓

計	其 他	ほ や	鳥 貝	鰈	鮮	鯛	鱈	鯖
一〇九、六九七	九、三九九	—	—	—	三、一八三	—	七、三二七	—
一三、六九五	一〇、六一	一、五〇〇	一、二〇〇	九、七九五	一四、六九三	—	一七、一四七	—
四、二七九	二、六八七	三〇〇	一、〇八〇	一三、二五〇	二、四五〇	—	六〇〇	—
三四、五三三	三、〇六六	三五	一、一四〇	一一、六四〇	一、八三六	—	一、七五〇	—
三二、三四一	二、八三五	二七六	一、一〇〇	一三、三五〇	一、五三〇	—	一、四〇〇	—
					七三〇	—	三、五〇〇	—
					—	—	—	—

水産製造業

一、現況 本市に於ける水産製造業の重なるものは海參、乾鰻、蒲鉾、竹輪、粕類等にして其の概況を擧ぐれば左の如し

一、海參 本品は陸奥灣内に産する海鼠を採獲製造したるものにして其の形状甚た大に色黒く刺

多きを以て名あり而して其の製品は神戸より輸出せられ本市の特産品として其の名海外に普ねし然れとも産額は年々減少の傾きあるを遺憾とする處なり此海參は専ら支那貿易品にして相當の輸出を見るも製造に従事するもの甚た少なきを以て將來は之を保護奨励して益々精良品の産出を圖るを肝要とす最近の生産額を擧ぐれば左の如し

年 別	製造數量	百斤(十六貫)ニ付單價	製造價額
昭和三年	三五、三〇〇	一六〇圓	四、〇〇〇圓
全 一二年	二七、五〇〇	一八九	五、一九八
全 元年	二二、五〇〇	一八九	四、三五三
大正十四年	二八、〇〇〇	二一〇	五、八八〇
全 十三年	三三、〇〇〇	二二〇	七、三六〇

一、乾鰻 鰻の生産額増大するに従ひ之が利用法に就ては素干品として田作又は煮干製とするもの多く近年大羽鰻の漁獲大なるに及び肥料に製造するもの甚た多し焼干品は本市の特産品にして近時其の販路擴張せられ需要逐次増進せり最近の製造高左の如し

種別	數量	價額
鹽製	一九、〇〇貫	四九、五〇圓
鹽干	四三、七九	三、九五一
節類	一六、三四	一九、六三
計	三五、二三	一〇一、〇六四

一、蒲鉾及竹輪 本品の原料は種々あれども本市の製品は多くは鮫及鱈を原料として製造し價額低廉なるを以て多數の職工を有する工場に歡迎せられ食料に供せらる從つて關西方面に輸出せるもの多し今最近の統計に依れば其の生産額左の如し

年別	製造高	製造額
昭和三年	五四、〇〇貫	五〇七、七八〇圓
全 二年	四四、〇〇〇	四四三、〇〇〇
全 元年	一七〇、一〇〇	二〇四、一三〇
大正十四年	一七六、七五三	二六八、一三八
全 十三年	五七、九六〇	一一五、九六〇

一、魚肥 本市の魚肥は主として鱈を締粕となす近時鱈漁獲の増大せると共に其の製産額も亦増加したり而して之れが販賣先の主なるものは東京、栃木、茨城、福島、群馬、長野の諸縣に亘る最近鱈締粕の生産額を擧ぐれば左の如し

年別	製造數量	製造價額
昭和三年	三三六、五〇〇貫	三〇、七五圓
全 二年	六二、六〇〇	三五、一〇三
全 元年	六一、六〇〇	三〇、八〇〇
大正十四年	一四、四〇〇	八、六四〇
全 十三年	七、五〇〇	五、六三五

一、水産に關する團體 本市には青森漁業組合、造道漁業組合及び沖館漁業組合の三組合ありて何れも漁業權を組合員に使用せしめ漁獲物の共同販賣場を設け當業者に利益を與へ且つ斯業の指導啓發を爲し大に發展を期する處あり又大正十五年九月二十三日青森罐詰製造同業組合を設置し斯業の改善發達を圖る爲め左記事業を行ふ

(イ) 製品検査及取締

(ロ) 製品等級制定

(ハ) 販路擴張商況の調査

(ニ) 取引上の改善保護

(ホ) 弊害矯正の施設其他組合にて必要と認めたる事項

一、青森市水産會 本會は昭和二年六月十八日の設立に係るを以て未だ其の成績見るべきもの尠なきも役員は協力一致本會の發展に努力しつゝあるを以て近き將來に於ては相當見るべきものあるに至るへし而して本會事業の概要を掲ぐれば左の如し

一、漁業の振興獎勵に關する事項

一、製品の改良検査に關する事項

一、販路擴張斡旋仲介に關する事項

一、經營改善調査に關する事項

一、功績者表彰に關する事項

一、罹災者救済に關する事項

一、其他水産業の改良發達に關する事項

工 業

一、現況 本市の工業甚だ幼稚にして其の生産額七百二十二萬九千三百二十七圓に過ぎず近來稍發達の機運に向ひつゝあるものは菓子、味噌、醬油、罐詰、蒲鉾竹輪、鋳力製器、蠟燭、氷桶樽類、建具指物、履物、印刷物、飴、粉類、ゴム製品等にして其他は甚だ微々たるものなり然れとも本市は正に工業地として起つべき素地を有す即ち本縣は山林に富み樹種の如きも杉、松、羅漢柏、落葉松、白楊樹、漆、樺、山毛櫸、桐等を産出し木工品の原料豊富にして且つ山野には蔓細工の原料たる木通蔓の繁茂するありて他より補給を要せざるなり殊に工業の原動力たる石炭は近隣の北海道に於て多量に産出するあり又電力を使用せんとせば現在の

電燈會社をして之れに應せしむるを得へし需用地も亦其の範圍廣汎にして販路に苦むの要なし進んで業を起すに於ては容易に發展の實を得へし

一、工業者數 本市の工業戸數は三千百九十三戸にして従業人員五千二人なり最近の統計を擧ぐれば左の如し

年 別	本 業		副 業		計	
	戸 數	人 口	戸 數	人 口	戸 數	人 口
昭和三年	二、八七六	四、八二九	三三五	一、八三三	三、二一三	五、〇〇三
全 二年	二、八五五	四、七六九	二七三	四六六	三、一三八	五、三三五
全 元年	二、四八三	四、一四八	二四八	四四四	二、七三一	四、五八三
大正十四年	二、六七八	四、八四八	二五七	一、三四	二、九三五	四、九八三
全 十三年	一、六三八	二、五二〇	二二三	一六一	一、八五一	二、六七一

一、工場 本市の工場は其の主なるもの味噌製造四、醬油醸造四、清涼飲料水製造四、飴製造二、製氷一、罐詰製造七、蒲鉾竹輪製造四、澱粉及粉類製造五、印刷業六、製材一〇、桤製造四

製函二、製樽二、スキー製造一、建具六、燐寸製造一、船舶製造二、鐵工業五、紙器製造三、漉返紙製造二、護謨製品一、蠟燭製造一、煉炭一、其他合計八十箇所にして其使用職工二千七百八十三人なり今最近の工場數及従業人員を擧ぐれば左の如し

種 別	工 場 數	職 工 數
十人未滿	四三	二九六
二十人未滿	六	七〇
三十人未滿	九	二二七
五十人未滿	七	二五四
百人未滿	一〇	七三三
百人以上	五	一、三三三
計	八〇	二、七八三

一、工産物 由來本縣は工業品の材料に富めるは前既に述べたるところにして良材豊かなれば量衡器、農具、曲物、挽物、軸木、經木細工、蔓細工、竹細工、木履家具類等工藝品の材料と

して餘りあり又本市としては米豆等の産額大ならざるも縣内の生産は大なるを以て味噌醬油等の原料として他縣より仰ぐの必要なく充分に醸成することを得へし依て各種工藝品の特産地たる他府縣に年々當業者を派して或は親しく其の工場を實査し製作品を見學せしめ或は販路を調査せしめて斯業改善發達に努めなば遠からず本市工業界を一新せしむるを得ん今本市の昭和三年中の工産物産額を擧ぐれば左の如し

種 類	産 額	種 類	産 額
建築用金具	五〇、七四〇圓	銅 鐵 器	一、二〇〇圓
鍍板武力細工	二、八五〇	金 銀 製 品	一三、五〇〇
車 輻	八、九〇〇	船	三五、三五
機 械 類	四二、四〇〇	石 灰	一三、九六〇
貝 灰 類	一六、六五〇	和 紙	三一、七三四
油 類	一六、九四三	蠟 燭	四三〇、五四〇
飴 類	三九、六三〇	氷	九六、二一〇

枕 木	三七七、一六一	樽 桶 類	一九四、三五五
桯 具 指 物	一一三、三六九	ス キ 類	三八、四三七
建 具 指 物	二八一、三三〇	箱 子 類	三五〇、六六一
履 物 (素地)	七四、七七〇	菓 子 類	二八七、〇四六
粉 類	六三、八四八	清 涼 飲 料 水	六七、三七六
味 噌 類	三〇、一九八	醬 油	三〇〇、七四〇
麵 類	四、四三五	罐 詰	一、三五三、四八
燒 干 魚 類	一九、六三三	蒲 鉾 竹 輪	五〇七、七八〇
洋 服	二九三、八〇〇	其 他 仕 立 物	四九、七五三
靴 小	四八、九八〇	帽 子	三、七六〇
莫 大 小	三三、五六〇	蔓 細 工	三、一五〇
杞 柳 細 工	一、五〇〇	竹 細 工	一八、九九四
藁 工	三三、三三三	疊 工	七五、〇五〇
紙 器	一八、七三〇	印 刷 物	六三八、四〇〇
造 花	三八、〇九四	傘	二、〇〇〇

提燈	一二、六五五	紙製品	九三、〇三九
魚粕	八八、四三五	魚油	一三二、四六〇
其他	四二、七七七	計	七、三九、三七七

以上工産物中本市の特産品とも稱すべきもの左の如し

一、味噌 本品は日常必須の需用品なれば農家に於ては何れも自製品を使用すれとも本市の製造に係るものは多く北海道及樺太、東京其他近縣へ輸出せられ好評を博しつゝあり而して當業者は優良品醸造に關し常に其の研究を怠らざるため愈々優良品を醸成するに至れり

年 別	製造戸數	職工數	數 量	價 額
昭和三年	一〇戸	五五人	四七七、三五貫	三〇、一九八圓
全 二年	一〇	五五	四八九、〇〇〇	三三、九三五
全 元年	一〇	五五	五六一、〇三五	三四〇、九七五
大正十四年	一〇	五三	四六八、三八五	三三、四八三
全 十三年	一〇	五七	四六三、三〇〇	三三、八七三

一、醤油 本品も亦味噌と共に日常の必需品にして本市の醸成品は近時大に改良を加へられ頗る美味を帯ひたるものを産するに至りて他縣産を優に凌ぐに至れり販賣先は北海道其の首位を占む

年 別	製造戸數	職工數	數 量	價 額
昭和三年	四	二四	四、八〇〇石	三〇〇、七四〇圓
全 二年	四	二四	四、七〇〇	二九三、六〇九
全 元年	四	二四	四、五六〇	二九六、四〇〇
大正十四年	四	二五	五、八三六	二九七、五五〇
全 十三年	四	二三	五、四六四	一九九、五二八

一、菓子類 製造者の技術近來著しく發達を來し他府縣に對し甚たしき遜色を見ざるに至れり就中本市の昆布羊羹、飴、林檎菓子等は其の顯著なるものなり昆布羊羹及飴は本市獨特の製品にして其の名全國に普ねし従つて從來の共進會、博覽會等に出品して優良賞を得たること甚た多く當業者は益々本品の改良を講しつゝあるを以て將來有望なりとす

年 別	製造戸數	職 工 數	製造價額
昭和三年	一一二	三六	三六、六六圓
全 二年	一〇七	一八三	三三八、二三
全 元年	六六	一六七	三三四、〇五〇
大正十四年	七三	一六〇	三〇三、五六
全 十三年	七	一六三	二五〇、八六五

一、罐詰類 本市の生産に係る罐詰は主として水産物にして果實蔬菜類の罐詰も多少は無きにあ
らざるも其の數極めて尠なし近時水産物の罐詰製造を専門とする坂上罐詰工場、大東食品株
式會社、根市罐詰工場等の設立ありて大規模の設備を爲し鮭鱒等は遠く露領カムチャツカ方
面に於て漁獲し之を本市に航送し同工場に於て製造するものなるが本製品は對外貿易品とし
て輸出せられ近時盛況を見るに至れり若し夫れ之に加ふるに蟹の罐詰を以てせば益々外國
貿易品の増大するを見るに至るへし

年 別	數 量	價 格
昭和三年	八四八、五八貫	一、三五、四八圓
全 二年	五五八、三〇	一、〇五、五七三
全 元年	七六一、九八九	一、三七九、二七七
大正十四年	二九五、三三五	三五三、一七五
全 十三年	一一三、六八八	一三六、七九七

一、麵類 乾餛飩及素麵の産額は四萬八千圓にして兩三年前に比し稍減少せるの傾きあるも品質
優良なるを以て縣外へ輸出せらるゝもの尠しとせず輒近需要多きに至りたるを以て將來有望
なり

年 別	製造戸數	職 工 數	數 量	價 額
昭和三年	三	三	四一、四三五貫	四一、四三五圓
全 二年	三	三	四三、六〇五	四三、六〇五
全 元年	七	三	四八、三〇四	四三、六五八

大正十四年	六	三	四三、六五五	四八、二八六
全 十三年	五	一四	四二、四五三	四六、八七三

一、木工品 本市の木工品として見るべきものは雨戸、障子の類にして其の他の家具類は出来せざるにあらざるも精巧を欠くの嫌ありて未だ稱揚するに足らず本市は既に述べたる如く木工品の原料を得るに容易なるにも拘はらず尙遅々として振はざるは斯業に對し投資者の無きか爲めなり若し本業に對し資本を投下するものありて意匠を凝らし精巧品を製作するあらば爲めに輸入品を防遏し得べきのみならず又以て庶幾くは將來本市の重要輸出品となすことを得ん最近の統計に依り木工品中の指物、箱類等の生産額を舉ぐれば左の如し

年 別	指 物		箱 類	
	製造戸數	職工數	製造戸數	職工數
昭和三年	三七	八九	一四	六
全 二年	三三	九三	三	六
全 元年	六七	一七四	一五	八〇
		二七、三〇〇		三九、九三五

大正十四年	六七	一七四	二九七、四八〇	一五	八〇	一三、七、六七〇
全 十三年	三三	一八九	二五四、三五七	一七	八四	一〇九、一四七

一、履物(素地) 本市木工品中指物及箱類に次ぐ重要品なるか前年に比し四萬圓の減少を見るに至りたるは原料たる桐材の價額低下したる爲めにして其の産額七萬四千七百七十圓なり而して本品は素地の儘東京、横濱及關西方面に輸出せらるゝもの極めて多し

年 別	製造戸數	職 工 數	産 額
昭和三年	一八	四五	七四、七〇圓
全 二年	一五	五〇	七、九八八
全 元年	一七	四五	八三、八〇〇
大正十四年	一七	四五	一三、四九七
全 十三年	一八	四四	一〇九、三七四

一、工業に關する施設 木工品の改良指導發達を圖るため大正二年五月青森市立徒弟學校を創立し年限二ヶ年なりしを大正四年三月三學年と改正し三學期とせり又大正六年九月青森市立工

藝學校と改稱し現在家具科、建具科、建築科の三科を置き生徒を養成しつゝあり
又本市工藝品の進歩發達を計る爲め昭和二年五月十五日青森木材工藝協會を設立せり而して
協會の目的を擧ぐれば左の如し

- 一、生産者、販賣者其他關係者の聯絡提携
- 二、圖案、工作、販路等の研究及發表
- 三、建議、請願
- 四、講演會、講習會の開催
- 五、展覽會の開催
- 六、展覽會、共進會、博覽會等の出品に對する援助
- 七、先進地の視察
- 八、其他本會の目的を達する爲め必要なる事項

商 業

一、現況 往時運輸交通の便拓けさりし時代にありては青森の商業も暁々として振はさりしも津
輕藩主津輕信牧公の此地開港せられてより以來明治四年縣廳を此地に置き同二十四年東北本
線鐵道開通するに及び年を逐ふて交通の便備はり繁榮の度を加ふるに至れり而して本市は東
北の盡頭にありて商取引は北は獨り北海道に止まらず遠く樺太、沿海州に及び南は又東北六
縣に止まらず北越、京阪地方に亘り密接の關係を有せり特に本市は交通上樞要の地にあるを
以て日夕の船車が吞吐する旅客の數日々六千以上に達し之等は多く本市の華客なり然るに近
時青函連絡待合所移轉せられてより北海道來往の旅客は市中に下車するもの減少せられ爲め
に市一部の商業者に對し一打撃を與へたるは誠に遺憾とする處なり然れとも本市は地理的關
係上對露並北海道、樺太漁業の策源地として將又貨物の中繼地として多くの移出入を見るに
至りて其の繁榮逐年増加の傾向にあり尙ほ内には地方人多く人込む師團及要港部の如きあり

て毎年軍艦の遊戈商船の往來は益々頻繁を告ぐるあり或は風光を訪ふ者温泉に出入する者多きを加へ店頭に客を曳くの便日一日と殷賑なる狀況あり今昭和三年の統計に依り商業者の各業別に其の戸數を擧ぐれば左の如し

物品販賣業	一、八六五戸	質屋	二九戸	牛馬宿	八戸
金錢貸付	一八六	下宿屋	四四	牛馬商	二四
物品貸付	五二	旅人宿	六七	運送業	二一九
貸座敷	二三	料理屋	一六五	周旋業	五二
飲食店	九九	代理店	三七	理髮	一七二
遊技場	一一	湯屋	二四	演劇場	八
其他	六九	計	四、一五五		

一、汽車乗降客 本市内には青森、浦町及浪打の三停車場あるも浪打停車場は最近の設立にして規模甚た小に只其の方面の便を計りたるに過ぎざるを以て青森、浦町の兩驛に就き乗降客の

狀況を見るに昭和三年に於ける青森驛の乗降客は百三十八萬六千五百三十三人、浦町驛乗降客は四十七萬八千〇三十九人にして此合計百八十六萬四千五百七十二人なり一日平均約五千人を算す今最近五ヶ年間の統計を擧ぐれば左の如し

年 別	乘 青 森 驛 計	乘 浦 町 驛 計
昭和三年	七〇五、六八〇人	六八〇、八五三人
全 二 年	六三三、五二六	六〇七、六六〇
全 元 年	六三四、六六〇	五八七、五四三
大正十四年	六四三、六〇六	六二七、七八八
全 十 三 年	五九八、四四六	五五五、五八八
		一、一八四、〇三四
		二八三、〇六三
		二八三、六〇一
		五六四、六六四
		三三八、八八三人
		三三九、一五七人
		四七八、〇三九人
		二四六、五八四
		四九一、六九一
		二四八、七五九
		四九三、三六四
		二七〇、三七八
		五四八、四一六
		二八三、六〇一
		五六四、六六四

一、汽車出入貨物 最近貨物の出入數量は青森驛四十二萬一千四百八十九噸、浦町驛六萬一千四百噸、計四十八萬二千五百九十三噸にして最近五ヶ年間の貨物出入狀況左の如し

年 別	青 森 驛		浦 町 驛	
	出 入	計	出 入	計
昭和三年	二八五、二三噸	一三六、三六噸	四〇、二五噸	三〇、九九噸
全 二年	二八三、一五四	一五〇、八三三	三二、〇七〇	一四、一九三
全 元年	二九四、二三四	二二、九四一	三七、〇三五	一三、八三三
大正十四年	二九、五一	一八、六七八	一六、三三八	九、一九九
全 十三年	三四、九三六	一五、八〇三	三三、八四三	八、一三一
				四一、九七四

一、青森函館間聯絡船乗降客 大正十四年中青森驛より乗船したるもの五萬八千九百十六人、青森市へ下船せるもの五萬七千九百八十六人にして出入合計十一萬六千九百二人なり之を前年に比し二萬七千九百人を増し年々北海道へ往復するもの増加の趨勢にあり又中繼にありては乗客三十五萬三千四百四十人、降客三十六萬八千五百四十一人、合計七十二萬一千九百八十一人にして年々著しき増加を見る最近五ヶ年間の比較を示せば左の如し

年 別	自 降 驛 計		中 降 繼 計	
	乗 降	計	乗 降	計
昭和三年	五八、九六人	五七、九六六人	三五三、四〇人	三六八、五四一人
全 二年	四五、八〇三	四三、〇九六	三五六、五九九	三五五、三三五
全 元年	五五、六七七	五三、三六六	三八六、七三〇	三七九、八八六
大正十四年	五五、〇五三	五六、八六八	三三、〇六四	三二八、七六六
全 十三年	五四、七三五	五三、八五四	二八八、〇六六	三〇三、〇一七
				五九〇、一三三

一、青森、函館間聯絡船出入貨物 昭和三年中青森驛より發送せる貨物は三千六百三十九噸又到着せる貨物は一萬三千九百七十二噸計一萬七千三百一十一噸にして前年に比し百三十八噸を増加せり又中繼せるもの三十五萬一千六百二十九噸入は四十三萬四千五百九十四噸計七十八萬六千二百二十三噸にして之を前年に比し二萬餘噸の増加を見る最近五ヶ年間の状況を擧ぐれば左の如し

年 別	自 自		中 中	
	出	入	出	入
昭和三年	三、六九噸	一三、六七噸	一七、三一噸	三五、六三噸
全 二年	三、六九五	一三、四七八	一七、一七三	三五、八三三
全 元年	四、一九七	一三、七三九	一七、九三六	三五、八八七
大正十四年	三、四四〇	一〇、一七三	一三、六三三	三〇、五三六
全 十三年	二、九四五	八、二八四	一一、三三九	二七、〇八九

一、青森、室蘭間船舶乗降客 昭和元年中青森室蘭間の船舶乗降者は三萬一千三百六十一人にし
て之亦年々増加の傾向にあり最近五ヶ年間自驛及中繼の旅客を示せば左の如し

年 別	自 自		中 中	
	乗	降	乗	降
昭和三年	四、六七〇人	四、三四人	九、〇四八人	一四、九三九人
全 二年	二、五七一	三、二〇一	四、七三三	?
全 元年	二、一五八	二、二〇〇	四、三五六	?

大正十四年	二〇、〇五八	二〇、七五三	四〇、八一	?
全 十三年	二、一四三	一三、四三三	三三、五七五	七、四三七

一、青森、室蘭間船舶出入貨物

年 別	自 自		中 中	
	出	入	出	入
昭和三年	一一、三四噸	四一、九三四噸	五三、二七噸	三六、五五噸
全 二年	一五、五四	六一、四九〇	七七、〇三九	三九、七九三
全 元年	一三、三四	四九、六六一	六三、九八五	三四、七六九
大正十四年	一四、五三七	五九、三九〇	七三、九三七	二一、一六六
全 十三年	三三、九三三	六一、三三六	八五、三五六	一九、五七九

一、青森港入港船舶 昭和三年中青森港へ入港せる船舶は總數六千五百九十三艘にして此總噸數
三百九萬六千七百六十二噸なり其の種類別を掲ぐれば左の如し

汽 船 四、四七七艘 登簿總噸數 三、〇六一、一六一噸

汽關ヲ有スル帆船	七六九	同	一四、三七四
汽關ヲ有セサル帆船	一、三四七	同	二〇、二二七
計	六、五九三	同	三、〇九六、七六二

一、青森港貿易 本港の貿易は近年著しく發達して最近の調査に依るに輸出高は一億六千七百四十六萬五千八百六十一圓に上り之を大正十三年の輸出高に比較するときは六千九百八十萬二千六百六十四圓を増し又輸入にありては最近の六千四百二十一萬九千三百三十七圓を大正十三年に比するに一千五百八十二萬八千二百九十六圓を減せり而して此の内外國貿易に屬するものを見るに其の輸出にありては七十一萬七千三百八十六圓輸入にありては九百六十六萬六千二十四圓を算せり尙外國輸入の重なるものは大連の大豆及大豆粕、尼古來斯、沿海州よりの鹽魚、ボルネオよりの原油、シマトラよりの揮發油、同石油、和蘭よりの油蠟、英國よりの鐵板等なり最近五ヶ年間の輸出入高の比較を示せば左の如し

年 別	輸 出		輸 入	
	内國貿易	外國貿易	内國貿易	外國貿易
昭和三年	一六六、七四九、四七五	七二、七三六、四一〇	一六七、四六五、八六一	五四、五五三、三三三
全 一二年	一三四、九七三、二七三	一〇九、三、五七一	一三六、〇六六、八四四	七三、八〇〇、五一一
全 元年	一五一、五三九、四二三	一五〇、九三六	一五一、六九〇、三三九	七三、五二一、〇八四
大正十四年	一五〇、四〇四、八六八	七七、六三九	一五〇、四八二、五〇七	七七、六三三、四三八
全 十三年	九七、一一一、三九四	五五、一、八〇三	九七、六六三、一九七	七三、八九三、五〇八

一、銀行 本市に於ける各種商工業の振興は金融機關の發達を促し銀行業の發展著しきものあり最近本市に本店を有するもの四又他銀行にして本市に支店を設けたるもの八合計十二銀行あり而して本店を有する銀行の資本總額は三百五十萬圓此の拂込濟額百九十四萬二千五百圓各種積立金四十五萬一千八百圓也今之を銀行別に掲ぐれば左の如し

銀行名	所在地	設立年月	資本總額	拂込濟額	各 種 積立金	預り金	貸付金
株式青森商業銀行	濱町	明治廿七年六月	一五〇,〇〇〇円	九二五,〇〇〇円	一六,一五〇円	四三六,九三三円	五四九,七三〇円

同 青森銀行	大町 同	廿九年六月	1,000,000	六四〇,〇〇〇	1,000,000	11,589,524	11,778,133
同 青森貯蓄銀行	大町	明治卅二年二月	500,000	162,500	1,367,500	5,000,911	1,577,009
同 青森貯蓄銀行	米町	大正十年十二月	500,000	335,000	483,000	2,947,505	935,331
計			3,500,000	1,947,500	4,513,000	19,499,334	13,410,144

以上の外本市に於ける各地の銀行支店の資金吸集並に貸出の状況は預り金総額八千八百三十六萬四千三百三十八圓にして貸付金総額五千三百十八萬二千七百六十一圓なり今各支店別に掲ぐれば左の如し

支店名	所在地	本店ノ位置	創立年月	本店共同資本金	拂込済額	支店取扱高	預り金	貸付金
株式會社 安田銀行青森支店	大町	東京市麴町區	明治卅二年五月	1,500,000,000圓	九二七,〇〇〇圓	二八,四九八,八〇〇圓	七,六六〇,六六八圓	
同 勸業銀行青森支店	米町	同	大正十年六月	九,〇〇〇,〇〇〇	七四,八七六,六三二	三,八八三,三五	五,〇四八,六九〇	
同 第五十九銀行青森支店	大町	弘前市親方町	明治十二年五月	1,000,000	五,六五二,五〇〇	三,九六七,八七三	三,七七四,〇四八	
同 盛岡銀行青森支店	米町	盛岡市紺屋町	大正十年六月	七,100,000	四,101,500	八,七〇1,10八	六,五二八,七六〇	
同 津輕銀行青森支店	米町	弘前市百石町	大正十年四月	1,500,000	九〇〇,〇〇〇	二,100,000	四,〇〇1,九四一	
同 弘前銀行青森支店	新町	同	一番町	大正十年四月	2,000,000	1,〇九五,〇〇〇	1,四五〇,四三八	九,二七六,九八

同 第五銀行青森支店	大町	盛岡市吳服町	大正二年六月	3,500,000	1,760,000	四一八,二四四	二,二八七,七六
同 陸奥銀行青森支店	新町	五所川原町	昭和十一年	3,000,000	1,100,000	四,三五一,四五	三,〇三二,七七六
計				12,800,000	18,246,062	88,364,238	53,182,761

一、信託業 本市に於ける信託業者は青森信託株式会社一社にして同社は大正十三年五月免許を受け専ら金銭及有價證券の信託を主とし未だ信託智識の一般的普及を見ざる今日に於て左記の如き成績を挙げつゝあり

資本金	1,000,000圓	拂込済資本金	500,000圓
信託口數	四五〇	信託財産	一,八八〇,九二四圓

一、無盡業 本市内の無盡業者は株式會社二及弘前無盡株式會社青森出張所の一あるのみにして前記二會社の状況を示せば左の如し

名	稱	所在地	資本總額	拂込済額	契約口數	給付金契約高
盛融無盡株式會社	寺町		50,000圓	三五,000圓	六,九六八口	三,五五九,〇〇〇圓

青森無盡株式會社 米町 100,000 100,000 10,156 5,441,800

一、商工會議所 青森商工會議所は明治三十六年十月の創立にして事業としては定時月報を發刊して内外市場に於ける貿易品の狀況其の他參考に資すへき調査及び統計を發表し或は商人の依頼に應じて調査證明又は紹介の勞を取る等當業者に利更を與ふるに努めつゝあり而して昭和三年一月一日より青森商工會議所と改稱せらる

組合及會社工場

一、産業組合 本市の産業組合は其の數十一組合あるも購買販賣組合は事業甚た振はざるに反し市街地信用組合は運轉資金相當に抱擁し組合員の産業並に其の經濟上の發展に努めつゝありて漸次見るべきものあるに至れり昭和三年末の狀況を掲ぐれば左の如し

組名	所在地	組合員數	出資口數	出資總額	同 上 拂込額	積立金	貯 金
青森信用組合	鍛冶町	一,五三一人	一六,五〇〇口	四九七,七〇〇円	四六七,〇〇〇円	六,三六〇円	一,三九一,九〇〇円

青 灣 信 用 組 合	博勞町	四四三		三,九九四	七九八八〇	五九,九七二	八,六七六	二〇八,四八一
青森庶民信用組合	米町	五二七		四一,〇五	一三,一五〇	八八,九三〇	七,四八七	一,四六,六九
青森建具購買販賣組合	同	一九		三〇〇	三,〇〇〇	二,三〇〇	一,七九七	
青森桶職材料購買販賣組合	新濱町	二八		三二七	三,一七〇	二,七九九		
青森靴購買販賣組合	長嶋	一八		二一九	七,六〇〇	三,七六三	一,五〇〇	
青森疊刺職購買販賣組合	鍛冶町	二六		五五	五五〇	五〇八		
青森曲物証購買販賣組合	長嶋	二六		一四四	四,三〇〇	三,〇六三		
青森農倉信用販賣組合	安方	八二		六〇七	三〇,三五〇	二八,八〇〇	二,三六〇	二九三
東青信用購買利用組合	堤町	六五七		一,三一九	三,七八〇	一,二三九		一,一〇〇
青森建築信用購買利用組合	長嶋	六三		二二〇	一三,〇〇〇	六,〇〇〇	一,七九	一,〇〇〇
計		三,三九九		二七,六四〇	七八四,八〇〇	六七四,四六六	一〇四,五五五	一,四六六,八八九

一、重要物産同業組合 本市の同業組合は薬工品商を以て組織せるもの及び罐詰製造業者を以て組織せるものゝ二組合にして事業は營業上の弊害を矯正し信用を保持し製品の検査改良統一其他營業の發達共通の利益を計るを目的とせり

名 稱	設立年月	所在地	組合員數	一ヶ年經費
東青薬工品同業組合	大正十年七月	米町	100	3,120圓
青森罐詰製造同業組合	同十五年九月	安方町	10	3,440

一、準則組合 本市の準則組合は其數三十三にして種類は各種商工業に亘り多種多様なり而して其の成績は良好なるものありと雖概して不振の状態にあり

二、會社工場 昭和三年末現在の會社（銀行を除き）は其の數百七個にして工場數は七十九ヶ所なり其の業別及出資額等を細別するに左の如し

一、株式會社

商號又ハ名稱	所在地	主要業務	設立年月	出資額又ハ資本金 總額 拂込額
株式會社青森商業銀行	濱町	銀行業	明治廿七年九月	1,500,000圓 915,000圓
青森電燈株式會社	浪打	電燈及電力供給	同廿九年三月	3,500,000 2,800,000
株式會社青森銀行	大町	銀行業	同 年六月	1,000,000 600,000

同 青灣貯蓄銀行	同 寺町	貯蓄銀行業	同卅二年二月	500,000 163,000
盛融無盡株式會社	同 寺町	無盡業	大正二年二月	50,000 35,000
株式會社歌舞伎座	鹽町	貸席業	同 年五月	25,000 17,500
同 青森常設館	美法	活動常設	同 年十月	43,000 26,250
同 大印運送店	安方町	運送取扱業	同 年四月	100,000 63,500
同 青森造船鐵工所	舘貝町	造船並鐵工業	同 年十二月	200,000 139,950
同 橫内金融株式會社	濱町	貸金業	同 年 月	100,000 83,500
青森運輸株式會社	新濱町	運送取扱業	同 年一月	100,000 56,000
株式會社青森鹽元賣捌所	米町	鹽元賣捌業	同 年六月	100,000 30,000
同 東奥日報社	長島町	新聞印刷業	同 年八月	60,000 45,000
青森飴製造株式會社	安方町	飴羊羹製造販賣	同 年九月	50,000 20,000
株式會社丸一商店	濱町	足袋メリヤス類販賣	同 年一月	50,000 30,000
青森製氷株式會社	新濱町	氷製造販賣業	同 年二月	500,000 350,000
東北商船株式會社	濱町	海運業	同 年 月	500,000 125,000

小館木材株式會社	浪打	製材並販賣業	同	年三月一、〇〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇
株式會社 啓明社	米町	石版、活版、印刷	同	年日 一〇〇、〇〇〇	五、〇〇〇
同 鳴海銀行	新町	銀行業	同	年六月一、〇〇〇、〇〇〇	三五〇、〇〇〇
青森印刷株式會社	寺町	印刷業	同	年七月 八〇、〇〇〇	三三、〇〇〇
株式會社松木屋吳服店	新町	吳服販賣業	同	十年三月一、〇〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇
青森製菓原料株式會社	舘貝町	菓子原料製造	同	年四月 一〇〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇
株式會社青森水産商會	新濱町	水産物輸送	同	年 七〇、〇〇〇	五五、〇〇〇
東洋海運株式會社	安方町	運送取扱業	同	年 三〇、〇〇〇	五、〇〇〇
株式會社 竹屋洋服店	大町	洋服裁縫業	大正十年五月	五〇、〇〇〇	一三、五〇〇
青森木材株式會社	美法	製材並販賣業	同	年六月 五〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇
青森製材株式會社	同	製材業	同	年 二〇、〇〇〇	七〇、八〇〇
青森柁株式會社	長島町	製材並柁割	同	年七月 二五〇、〇〇〇	六三、〇〇〇
青森信託株式會社	米町	信託業	同	年八月一、〇〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇
株式會社 桂井同漕店	新安方町	運送取扱業	同	年 一〇〇、〇〇〇	三五、〇〇〇
同 青森貯蓄銀行	米町	貯蓄銀行業	同	年十月 五〇〇、〇〇〇	三五、〇〇〇

同 東北タンク商會	濱町	物品販賣業 (油類)	同	年十二月 五〇〇、〇〇〇	一七五、〇〇〇
同 文藝館	鹽町	活動常設館	同	十一年二月 三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇
青森起業株式會社	大町	浴場及貸席業	同	年 一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
株式會社 青森館	野脇	活動常設館	同	年三月 一〇〇、〇〇〇	五五、〇〇〇
青森無盡株式會社	米町	無盡業	同	年七月 二〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
青森薪炭株式會社	舘貝町	薪炭卸賣商	同	年 五〇〇、〇〇〇	一三五、〇〇〇
株式會社青森臨港倉庫	新安方町	倉庫業	同	年八月 六〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇
丸進青森履物株式會社	大町	履物製造販賣	同	年十月 一〇〇、〇〇〇	三五、〇〇〇
青森製網株式會社	博勞町	製網並貸家	同	十二年三月 五〇〇、〇〇〇	一三五〇
松田木材株式會社	安方町	製材並販賣業	同	年四月 五〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇
株式會社青森スキー製作所	橋本	スキー製作	同	年 五〇、〇〇〇	一一、〇〇〇
青森土地建物株式會社	寺町	不動産ノ賣買	同	年五月 一〇〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇
青森商事株式會社	橋本	金錢貸付業	同	年 三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇
丸屋同勤株式會社	濱町	貸金業	同	十三年五月 五〇、〇〇〇	一一、五〇〇

二葉商事株式會社	橋本	金庫類販賣業	同	年九月	100,000	25,000
丸東運輸株式會社	安方町	運送取扱業	同	年九月	100,000	100,000
株式會社 三輪運送店	同	同	同	年九月	200,000	200,000
浪打木材株式會社	浪打	製材並販賣	同	年十月	50,000	12,500
渡邊株式會社	米町	貸金業	同	年十月	100,000	47,500
株式會社 三上商店	新濱町	罐詰製造業	同	十三年十一月	10,000	10,000
青森商事金融株式會社	長島町	貸金業	同	同十四年四月	100,000	25,000
青森保全株式會社	濱町	貸金業	同	同十四年五月	50,000	50,000
大坂商事株式會社	博勞町	質屋業	同	同十四年五月	150,000	150,000
伊藤商事株式會社	安方町	同	同	同十五年一月	10,000	5,000
大東食品株式會社	浪打	罐詰製造業	同	同十四年四月	100,000	100,000
青森魁印刷株式會社	濱町	印刷業	同	同十四年一月	5,000	5,000
青森運送合同株式會社	安方町	運送取扱業	同	同十四年二月	300,000	240,000
株式會社 加福自動車商會	濱町	自動車販賣業	同	同十四年九月	100,000	50,000

二、合資會社

青森ラムネ製造合資會社	寺町	ラムネ製造業	同	明治卅二年三月	50,000	50,000
味噌製造合資會社	濱町	味噌製造業	同	同十四年十月	10,000	10,000
青森郵船合資會社	安方町	船舶代理業	同	同十四年八月	40,000	40,000
青森氷雪合資會社	舘貝町	水販賣業	同	同十四年二月	5,250	5,250
合資會社 東商店	安方町	海產物問屋業	同	大正二年二月	50,000	50,000
青森製紙合資會社	浪打	製紙業	同	同三年九月	4,000	4,000
合資會社 青森新聞社	米町	新聞發行	同	同五年四月	4,750	4,750
鍵屋同勤合資會社	濱町	桐栽培	同	同七年十月	7,000	7,000
合資會社 成萬商店	美法	桶樽製造業	同	同十一年八月	7,500	7,500
相互保全合資會社	新濱町	貸金業	同	同十二年一月	67,000	67,000
合資會社 福士商店	新町	米穀輸出商	同	同十三年九月	6,000	6,000
同 丸越工務所	長島	建具、家具、製作	同	同十一年十一月	2,000	2,000
同 新田商店	美法	陶器販賣業	同	同十四年九月	5,000	5,000

同	石川罐詰工場	新濱町	罐詰製造販賣	同十五年一月	七五、〇〇〇	七五、〇〇〇
同	高橋太陽堂	大町	料理店業	同年二月	八、〇〇〇	八、〇〇〇
同	樋口商店	橋本	木履販賣業	同年四月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
同	合資會社 柳谷洋服店	大町	洋服販賣業	同十五年四月	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
同	片山運送店	橋本	貨物運送取扱業	同年六月	四、〇〇〇	四、〇〇〇
商興合資會社	長島	貨家業	業	同年	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
合資會社	丸山洋品店	大町	洋品類販賣業	同年八月	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇
同	淺井商店	新町	藥品販賣業	同年九月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
同	工藤商店	橋本	古着類販賣業	同年	三、〇〇〇	三、〇〇〇
同	奥田商店	安方町	吳服太物販賣業	同年十月	二、〇〇〇	二、〇〇〇
同	久保内商店	浦町	紙類販賣業	同年	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇
同	木村製材所	浪打	製材業	昭和二年二月	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
同	金福三浦音松商店	新町	果實問屋業	同年	四、〇〇〇	四、〇〇〇
同	金六久保商店	濱町	海陸物産信託販賣	同年	四、五〇〇	四、五〇〇
同	立田商店	長島	米穀薪炭販賣業	同年五月	三、〇〇〇	三、〇〇〇

同	山田金庫店	大町	金庫類販賣業	同年九月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
同	青森船舶給水所	新濱町	飲料水供給販賣	同年十月	四、五〇〇	四、五〇〇
同	奈良商店	篠田	鮮魚酒類販賣業	同年十一月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
同	津島染工場	橋本	染物洗濯洗張屋	同年	五〇〇	五〇〇
同	田中洋品店	濱町	洋品類販賣業	同年十二月	一、〇〇〇	一、〇〇〇
同	奈良岡商店	同	精米並販賣業	同年	五、〇〇〇	五、〇〇〇
同	金甚合資會社	大町	物品貸付業	同三年一月	—	—

三、合名會社

合名會社	若由商店	新安方町	海產物問屋	明治學三年三月	一三〇、〇〇〇	一三〇、〇〇〇
合名會社	齋藤木材合名會社	長島町	木材販賣業	同四十五年四月	三、五〇〇	三、五〇〇
合名會社	松屋洋服店	大町	洋服裁縫業	大正二年七月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
同	盛喜商店	米町	吳服太物卸商	同年十一月	一五〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇
同	小田二商店	新安方町	海產物委託問屋	同十年十二月	二、〇〇〇	二、〇〇〇
同	奥崎合名會社	橋本	貸家土地建物所有	同十四年一月	五、〇〇〇	五、〇〇〇

丸正運送合名會社	橋本	運送取扱業	同十四年六月	六、〇〇〇	六、〇〇〇
合名會社金原商店	大町	砂糖、麥粉卸賣	同年十二月	五、〇〇〇	五、〇〇〇
同 三浦博盛堂	橋本	賣藥販賣業	同年 月	五、五〇〇	五、五〇〇
廣海合名會社	大町	清酒及醬油販賣	同十五年八月	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
合名會社 喜多一商店	蜷貝町	履物販賣業	同年九月	三、〇〇〇	三、〇〇〇
同 大場商店	安方町	魚類販賣業	昭和二年十月	四〇〇	四〇〇

一、機械器具工場

工場名	所在地	事業開始年月	主要業務	工場主名
青森鐵工場	古川	明治廿六年六月	諸機械製作修理	西村長松
鈴木鐵工場	浦町	同四十二年四月	農具機製造	鈴木常五郎
鹿内銀冶工場	榮町	大正二年四月	農具製作	鹿内由太郎
株式會社青森造船鐵工所	蜷貝町	同七年五月	船舶製造	小館保次郎
同 青森スキー製作所	浦町	同十一年六月	スキー製作	鈴木大觀
東奥鐵工場	長島町	同年十一月	諸機械製作修理	樺澤平八郎

二、化學工場

海保海陸汽罐製作所 新濱町 同十五年二月 諸機械製作 海保新吉

二、化學工場

青森製蠟所	浪打	明治四十三年九月	洋蠟燭製造	横内忠作
青森製紙合資會社	同	大正三年九月	漉返紙製造	岡野正治
篠原製紙工場	同	同年十月	同	篠原善次郎
青森製氷株式會社	新濱町	同九年十月	氷製造	坂上五郎兵衛
青森ゴム工業所	沖館	昭和二年九月	ゴム靴製造	柿崎源内

三、木製品工場

宮本製樽工場	浦町	明治卅十年四月	樽製作	宮本善吉
坂本証割工場	長島町	同四十二年六月	証割	坂本周八郎
青森製函工場	蜷貝町	大正二年十月	函製作	岡野幾之助
川村燐寸工場	浪打	同四年十二月	軸木製造	川村市太郎
森岡製樽工場	松森町	同六年十二月	樽製造	森岡永太郎

稻田 建具工場	米町	同	十一年五月	建具製作	稻田 善七
小館川尻 桤割工場	蜷貝町	同	十一年八月	桤割	小館 保次郎
長村 木工場	古川	同	十三年二月	家具製作	長村 勇吉
工藤 桤割工場	長嶋町	同	十四年四月	桤割	工藤 鐵三郎
副田 桤割皮工場	沖館	同	十四年一月	桤割 檜皮製造	副田 兼吉
羽賀 桤割工場	浪打	同	十五年八月	桤割	羽賀 勝永

四、製材工場

小館木材株式會社 製材工場	浪打	明治二十三年	製材業	小館 保次郎
柿崎 製材所	同	卅七年九月	同	柿崎 豊吉
青森木材株式會社	古川	同	同	村本 良助
青森挽材株式會社	寺町	同	同	成田 文吉
大湊木材株式會社 製材工場	浪打	大正元年八月	同	長谷川 鏡次
秋田木材株式會社 青森製材所	沖館	同	同	宮越 勝藏
株式會社 製材所	古川	同	同	大森 重吉

合名會社 青森製材所	浪打	同	八年十月	同	荒川 勇造
藤田組 材木店	同	同	十年四月	同	西澤 伊兵衛
淡谷 材木店	古川	同	年六月	同	古川 和三郎
青森製材株式會社	長島町	同	年八月	製材、桤割	小田 桐政信
青森桤株式會社	沖館	同	十二年十二月	製材業	杉浦 佐次郎
杉浦 製材所	浪打	同	十三年五月	同	木村 門太郎
木村 製材所	沖館	同	十四年五月	同	伊藤 直一
松田木材株式會社	浪打	同	昭和二年七月	同	
伊藤 製材所	浪打	同		同	

五、飲食料品工場

三橋味噌醬油製造所	大工町	寬政元年十月	醬油、味噌製造	三橋 三吾
丸サ味噌製造所	米町	弘化四年	味噌製造	渡邊 佐助
島津味噌製造所	同	明治元年五月	同	嶋津 圓次郎
和田醬油釀造所	榮町	同	醬油製造	和田 與作
青森ラムネ製造所	寺町	同	清涼飲料水製造	横井 與吉

鎌重味噌製造所	濱町	同卅三年六月	味噌製造	鎌田重吉
一與味噌製造所	博勞町	同卅五年十二月	同	村本喜四郎
和田精米所	新安方町	同四十年一月	精米	和田幸吉
高橋蒲鉾製造所	大町	大正二年九月	蒲鉾製造	高橋重吉
奈良精米所	古川	同年十月	精米	奈良佐市
青木蒲鉾製造所	柳町	同年	蒲鉾製造	青木弘
和田醬油株式會社第二釀造所	浦町	大正六年七月	醬油製造	和田寛次郎
照井蒲鉾製造所	蜷貝町	同七年十月	蒲鉾製造	照井徳助
沼田蒲鉾製造所	堤町	同年十一月	同	沼田磯吉
朝日ラムネ製造所	銀冶町	同九年四月	ラムネ製造	佐藤鐵之助
製菓原料株式會社	蜷貝町	同十年五月	菓子原料製造	高松藤吉
青森飴製造株式會社	安方町	同年十月	飴製造	星政吉
三上竹輪製造所	浪打	同年	竹輪製造	三上金助
細井ラムネ製造所	大町	同十二年四月	ラムネ製造	細井儀助
岡本ラムネ製造所	博勞町	同十四年四月	同	岡本佐次兵衛

柳川竹輪製造所 堤町 同十五年十一月 竹輪製造 柳川秀太郎

六、罐詰工場

岡本罐詰工場	浪打	明治卅五年四月	罐詰製造	岡本龜四郎
根市罐詰工場	同	大正二年四月	同	根市兼次郎
鈴木罐詰工場	安方町	同七年五月	同	鈴木力藏
石川罐詰工場	新濱町	同年八月	同	石川清吉
坂上罐詰工場	浪打	同年	同	坂上辰藏
株式會社三上商店	新濱町	同九年七月	同	三上圓太郎
大東食品株式會社罐詰工場	浪打	同十五年六月	同	森眞
久保罐詰工場	濱町	同年七月	同	久保國松

七、被服工場

平野靴製造所	大町	明治四十三年九月	靴製造	平野彦四郎
村田靴製造所	博勞町	大正六年九月	同	村田忠太郎

田中洋服裁縫業 新町 同十年四月 洋服仕立 田中徳太郎
高橋靴製造所 同 同十三年三月 靴製造 高橋彌左衛門

八、印刷工場

青森日報社 柳町 明治十三年六月 新聞印刷 竹内清明
株式會社 東奥日報社 長島町 同廿一年十二月 同 山田金次郎
株式會社 啓明社 米町 大正九年三月 印刷 和田喜太郎
青森印刷株式會社 寺町 同 年七月 同 土田和吉
黎明社 太田印刷所 安方町 昭和二年四月 同 小島武雄

九、雜工場

市戸疊製作所 米町 嘉永六年一月 疊製作 市戸良助
松井紙器工場 同 明治四十二年七月 紙器製作 松井桂三
カネウ 鈴木製繩工場 沖館 昭和二年九月 繩製造 鈴木敬一

交 通

一、道路 本市を中心として發達せる道路の幹線は三條あり一は東方榮町を経て東京に至る南部街道二は西方古川を経て弘前方面に至る奥羽街道三は西北方海岸に添ふて北走する上磯街道是なり其他東津輕郡高田村に至るもの全横内村を経て八甲田山酸湯温泉に達するもの造道村に至るもの等あり而して市内道路の延長は國道二里二丁三十五間縣道一里十六丁五十四間市道十五里三十二丁十五間計十九里十五丁三十四間なり

一、鐵道 青森驛を終点として東北本線、奥羽線、羽越線の列車此處に集中す是故に客貨の發着數年々増加し貨車の操縦益々複雑を極め來れは鐵道省にては早くより操車の便宜を計り市の南方に一大操車ヤードを設け從來の東北、奥羽兩線を後方に移して二者の一路連繫を計り大正十五年度に於て完成せり又一方海陸連絡の完成を計り既に青森築港を利用して連絡船の繋船岩壁を築造し引込線を以て貨車の航送を爲すこととせり又就航連絡船は新に三千五百噸の

翔鳳丸、津輕丸、松前丸、飛鷺丸の四隻を使用するに至りて従来の海陸聯絡に一新面目を添えたり陸上は更に青森驛を擴張し浦町驛を後方に移轉して規模を擴大にし又大正十二年以來市の東端に浪打驛を開設せり

一、市中交通 市内に乗合馬車七臺人力車百六十四臺自動車乗用五十九臺の外市營乗合自動車十八臺あり賃金極めて廉なり

一、通信 一等局青森郵便局の外市内に六個所の三等郵便局あり又鐵道船舶郵便局ありて船車郵便の仕譯發送を爲す此の外市内沖館に鐵道省の無線電信所ありて有線無線の電話連絡せり又本市電話加入者は一千四百七十八にして北海道、旭川及東京との長距離通話を爲しつゝあり

一、青森築港 青森港修築は歴代政府に於ても夙に其の必要を認め總工費百九十五萬圓内國庫補助九十七萬五千圓鐵道省より二十二萬五千圓の補助を受け縣費負擔七十五萬圓にして大正三年起工せり、十三年七月を以て全部竣工し八月二十八日竣工式を挙げたり完成せる防波堤水面包容面積は四萬一千三百坪にして防波堤延長は次の如し

西防波堤	二二〇間	北防波堤	一九〇間
東防波堤	三五間	物置場	三〇六間
上屋倉庫敷地	一、六三二坪		
埋立區域	六、二〇〇坪		
鐵道岸壁有効延長	一三〇間		
水面干潮面積	二二尺		
埋立地面積	四、一〇〇坪		

然るに本築港は規模極めて狭少にして水深最も深き部分二萬四千坪は鐵道青函連絡船の出入並に繋留の爲め使用せられ一般の利用に對しては僅かに水深十二尺以下に屬する約二萬坪の船溜に過ぎず最近一ケ年間の内外移輸出貨物總量百五十萬噸を超へ此の貿易總額二億二千萬圓に達する現況に適應せざるは勿論將來の發展に備ふるの途なきの状態なれば本港第二期の修築は本縣多年の懸案にして歴代の本縣當局に於ても既に其必要を認め之れが實現に就

きては舉縣一致の行動を採り知事を會長とし縣會議員、市會議員、商工會議所議員並に各方面の有力者を幹部としたる青森築港國營期成會を設立して青森築港國營及國費支辨港に編入方を内務大臣及本縣知事へ意見書を提出し又貴衆兩院へ請願書を提出して之を採擇せられたるのみならず衆議院に於ては全會一致を以て建議案を可決し加ふるに内務當局に於ても其の必要を認め鈴木内務大臣親しく港灣を視察せらるゝあり又再三關係官吏を派遣して實地に港灣及青森市の現況を踏査せしむる等の事實あり又前年縣及港灣協會青森支部並に青森築港國營期成會より港灣協會に依頼して調査したる修築擴張案の成るありて最早青森の築港は實行の時期に移りたるものなれば必ずや近き將來に於て其の實現を見ることと信せらる第二期擴張計畫案を掲ぐれば左の如し

總工費 一千二百六十五萬圓 工事期間六ヶ年

工費見積書

防波堤費 五百萬圓

西防波堤延長 二〇〇間 東西直線堤 六四〇間

東防波堤 一六〇間

岸壁費 二百九十四萬圓

水深十八尺乃至三十尺 繫船岸壁 長各百間もの九ヶ所 長八十間一ヶ所

物揚場護岸費 八十四萬五千圓

埠頭突堤前端並に埠頭間の凹形水面の奥部其埋立地の周圍

埋立費 百二十八萬八千圓

市街地前面に於て面積七萬八千坪

導水堤費 二十萬圓

堤川左岸導水堤

機械船舶費 百萬圓

浚渫船、土運船、曳船、起重機類、混凝土工事及ひ石材切出設備其他一式

營繕費 八萬圓
 雜費 六十萬七千圓
 事務費 六十六萬圓
 每年十一萬圓つゝ
 計 一千二百六十五萬圓

臨港鐵道布設費上屋倉庫築造費道路費等の陸上設備費は總て除外せり

一、海岸埋立 青森海岸は荷揚場狭少にして一般に不便を感ずること甚たしき爲め當市材木商小
 館保次郎氏は堤川尻海面八千四百餘坪の埋立を内務省に請願し大正十四年四月認可を受け工
 事を起し昭和三年十一月竣工を告げたり

財政

一、市の公債 本市の公債は總額百四十三萬九千四十五圓にして昭和三年末現在未償還額は百十
 五萬六千六百二十九圓なり内譯左の如し

起債の目的	起債額	未償還額
火災善後經營	四〇〇,〇〇〇圓	三〇一,五〇〇圓
小學校及水道布設	五〇五,六三七	三八六,六三三
小學校増築	三三〇,〇〇〇	一八一,〇七九
市營住宅建設	四九,〇〇〇	三三,〇〇〇
窮民救済資金	二二,九三七	二二,九三七
土地購入設備費	二二,五〇〇	二二,五〇〇
鐵道廢線路購入費	一九,九九一	一九,九九一

計 一、四三九、〇四五 一、一五六、六三九

一、市有財産左の如し

(1) 土地	宅地	舊練兵場敷地	雜種地	公園	藁芥焼場	造林地	學校敷地	計
	四、三二坪六	一六、三三、四	一、六九八、〇〇	三、六八六、〇四	一〇九、〇〇	六、三三〇、〇〇	三三、六六一、一七	一八五、三四坪六三
	市役所敷地	貸家敷地	屠場	火葬場	共葬墓地	原野	市水道部用地	
	六四坪七	一、四三一、〇五	六三八、〇〇	一、四四、〇〇	六〇〇、〇〇	七二、〇〇	一〇九、〇五七、〇〇	

(ロ) 建物

市役所	火葬場	屠場	街路便所	學校建物	貸家	水道部建物	計
四三坪七〇	一〇五、一五	八三、〇〇	三五、三五	九、八七三、〇〇	四九三、五〇	二五四、五六	一三、〇三七坪六
傳染病舎	公園地内建物	消防機械置場	市場建物	職業紹介所	公會堂	市交通部建物	
二六三坪七五	三三、一〇	三三九、〇〇	七六、五〇	一三七、五〇	七二、五〇	一五二、一五	

(ハ) 現金

各種積立金 八萬六千二百四十五圓四十八錢
 一、市一部の財産左の如し

(イ) 土地

宅地 六〇三坪〇〇

畑 三六三坪〇〇

原野 二、九三六、〇〇

計 三、八九二坪〇〇

(ロ) 現金

各種積立金 四千六圓六錢

一、歳入歳出本市昭和二年度の経費決算額左の如し

(イ) 歳計 昭和二年度決算歳入額は百十三萬二千九百七十七圓六十四錢にして収入の主なるものは使用料及手数料十六萬四千八百八十圓國庫下渡金四萬三千十圓繰越金十一萬五千九百九十一圓雑収入五萬四千四百圓市税四十四萬五千七百四十七圓工費收入二萬七千四百四十圓市債二十三萬二千四百九十一圓等なり又歳出額は經常部五十八萬九千八百七十七圓四十二錢全臨時部四十八萬四千六百四圓五十錢合計百七萬三千六百九十一圓九十二錢なり

(ロ) 本市昭和四年度経費豫算左の如し

歳入 金百拾五萬六千六百六圓

歳出 金百拾五萬六千六百六圓

經常部 金六拾二萬二千九百九十九圓

臨時部 金五拾三萬三千六百七圓

雜

一、市内官公衙及團體所在地

青森縣廳	長島町	青森刑務所出張所	柳町
青森市役所	新町	青森營林局	沖館
青森地方裁判所	長島町	青森營林署	同
同 檢事局	同	青森運輸事務所	安方町
青森區裁判所	同	青森保線事務所	同
同 檢事局	同	青森 森 驛	同
青森警察署	新町	浦町驛	浦町
青森刑務所	荒川	浪打驛	浪打
青森郵便局	濱町	函館稅關青森支署	新濱町

青森測候所	濱館	仙臺專賣局青森支所	浦町
青森稅務署	浦町	仙臺遞信講習所青森支所	浪打
青森市公會堂	新濱町	青森縣穀物藥品檢查所	長嶋町
青森市職業紹介所	新町	青森縣度量衡檢定所	新町
青森聯隊區司令部	筒井	青森商工會議所	同
步兵第五聯隊	同	鐵道船舶郵便局青森出張所	安方町
青森憲兵隊	同	青森土木管區事務所	長島町
青森衛戍病院	同	青森縣農會	同
日本赤十字社青森支部	新町	東津輕郡農會	同
青森市農會	新町	青森種雞場	八重田
青森健康保險署	濱町		

市中見物案内

始めて青森停車場又は連絡待合所に御着きの方は市中見物に就て如何に道順又は視察個所を選ばれますか夫れは必要に因つて各異なるのでありませうが概して産業視察を本位として左に述べやうとするのであります

先づ停車場には運輸、保線の兩事務所があります運送店の重なる者は此の附近に散在して居ります連絡設備や鐵道線路擴張の状況を御調査にならうと云ふ方は此處を中心にさるへきてあります、其他の方面を視察する方は驛前から人力車を雇ふか若くは自動車に乗られて新町通りを参りますと約五丁はかりの處で右側の角に陸奥銀行青森支店があり其の南方の突當り正面の建物か青森縣廳であります此の附近には官公衙か櫛比し青森市役所も此の廓内に在ります市役所の角から再び新町通りに出て一丁を過ぎると左側に在る高層樓は市内唯一のデパートメントストア松木屋吳服店であります

此處は川を隔てた路幅の廣い街でありまして柳町と言ひ青森市第一防火線となつて居ります此の川に添ふて南に向ひますと國道通りに突き當るので左折して東に向ふと間もなく右側に在る大きな建物は縣立青森病院であります夫れから餘り見るべき物もなく五六丁にして右側に浦町停車場があり左側には青森女子師範學校及高等女學校があり其の東側に道路を隔たてゝ女子師範學校の附屬小學校があります更に二三丁を通過すると堤川に出ます橋を渡らすに右折すると間もなく小館木材株式會社に着きます此處の製材工場は堤川を控えて一方には川に通する大きな堀割を有し流材と貯木に至便を得て居ます殊に同工場は最近に新築したもので最も斬新な設備かしてあり東北ての模範工場と稱されて居ます此處から一步を進めると和田醬油釀造所があり是れ亦最新の大規模な設備をして居り次には佐々硝子工場があり斯業に於て東北の先驅となり經營古く設備も地方稀有な完備したものであります其處から十町ばかりて歩兵第五聯隊に達し夫れを過ぎて青森水道水源地に至るのであります然し時間の無い方は小館會社から引返して堤川橋を渡ると橋畔に由緒ある諏訪神社があり一驅すると七八町を経て右に男子の師範學校があり此の附近には最近數

萬金を投して出來た佃グラウンドがあります此處は位置の關係上東北運動競技の重要地点となる者とされて居ります接續地点は元五聯隊の練兵場でありましたが前年練兵場を駒込村へ移轉と同時に青森市に拂下けられ市の住宅地として分筆賣却せられつゝあります是と向ひて青森縣立商業學校、同中學校があり次きは合浦公園であります此の公園は市有であつて面積二萬一千餘坪あります人工に於て不充分でありますが老松自然に技巧を呈し濤聲風韻に和して夏期の涼味愛すべく特に雪中の景は一段と賞されて居ます入口に浪打停車場及自動車停留場があります一觀して公園の裏口から田甫路に出ると海岸には大東食品株式會社の大工場を觀られます本工場は昭和三年十月十五日火災に罹り其の損害約九十五萬圓を算しました本年之れが復興増設を計り諸費用十四萬圓を投して同六月廿七日落成式を挙げたるものであります罐詰製造能力は一日四千箱にして罐數は十九萬二千個であります又此の海岸一帯は海水浴場となります更に西に向ふと再び堤川に戻るのてありますか此附近には青森電燈會社を始め大湊、淡谷、柿豊、千年屋等の製材工場、東北タンク商會の蠟燭製造工場、軸木工場、坂上罐詰工場等が密接して居ります明治四十三年の青森大火

前は此處は柳原遊廓として絃歌歡樂の地であつたのであります桑蒼の變亦驚くへきてはありませんか

橋を渡ると蜷貝町で右に曲ると魚市場があり其處から海に出ると即ち堤川の河口で其處の海面八千四百坪を小館保次郎氏が個人で埋立したのであります蜷貝町通りは四五丁にして海の手に青森造船鐵工所があり隣りには青森製函工場があります更に西すると小川があり此處は青森第二防火線であつて是から町名も濱町と變り一丁を過ぎて奈良岡精米機械場があり其の隣りの角は小館木材會社支店で此の裏の海岸に青森公會堂があります公會堂の設計は全部鐵筋コンクリートの三層樓で一階は貴賓室、應接室等があり二階は小集會、三階は大廣間で一千人餘の大會が出来る様になつて居ります又一階の右端に食堂の設備ありて廉價に洋食を提供して居ります工費は拾六萬貳千圓で大正十三年七月着手し全十四年落成したのであります工費や規模は大きいと言はれませんが市としては土一升金一升の土地を割愛し眼下に青森灣を見下し眺望の佳絶なる事を誇りとするものであります

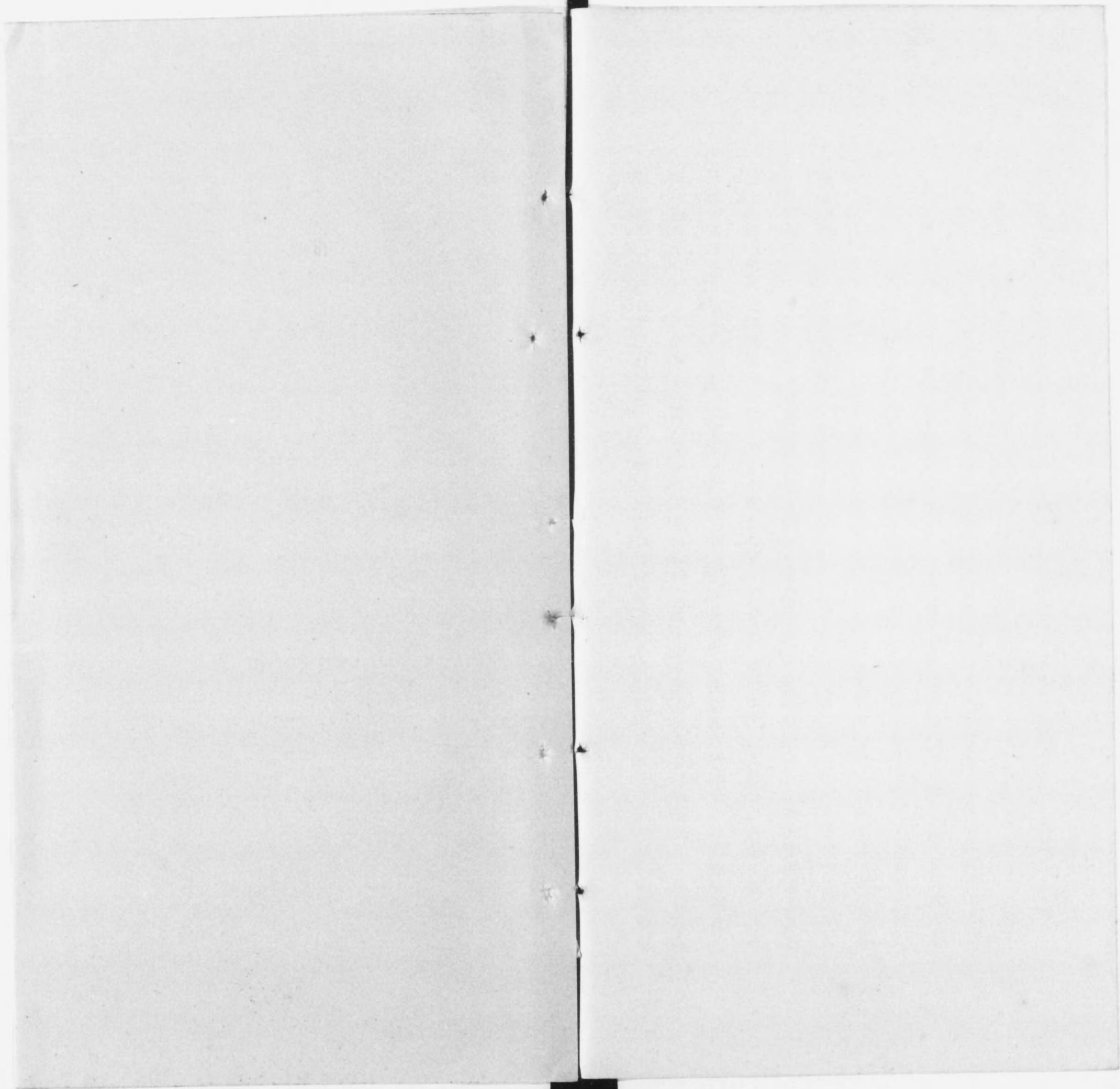
濱町には青森郵便局があり此の裏に青森製氷株式會社がありますが是は必ず御一覽すべき必要あると思ひます郵便局の次の角を海に向ふて青森棧橋に出つへく其の次の角は神病院であります其處で市の經濟の中心とも言ふべき大町又は米町を視察するには少し後戻りをしなければなりません大町には第五十九銀行青森支店、安田銀行青森支店があり米町には日本勸業銀行青森支店があり其の他大商店は此の邊に在ります斯うして兩町の何れかを通り抜けると突當りが縣社善知鳥神社でありまして昔時大きな湖沼であつた安湯が今尙ほ小さな溝として佛を止めて居ます此處から海岸に出ると築港面であつて海に對して海産物の大問屋が軒を並べ其の重なるは沖五坂上商店、千葉傳商店、山一若井商店、山十若井商店、佐末商店、角萬岸商店、根市商店、石川商店、三上商店、林兼商店等であります此の魚市場は鮮魚の集散では全國中下ノ關に次く大市場でありまして春の鯉、夏秋の鮭、鱒、冬の鱈、鮫等遠くは沿海州、樺太より近くは北海道近海等から盛んに直輸入し來り其の季節毎に非常な賑ひを呈して居ます回漕店も此の附近に最も多いのであります

此處から海に沿ふて西に進むと築港に向つて巍然たる建物が三個所あります日魯冷蔵倉庫、大

東冷蔵倉庫、青森臨港倉庫でありまして何れも鐵筋コンクリート建築で最新の設備をして居るので鐵道では此處まで線路を延長し船舶との連絡を充分にして居りますから極めて便宜ある模範的倉庫とされて居ます其隣は青森室蘭定期船の取扱所たる北日本汽船會社青森出張所であり先づ市内で御案内すべき所は大體斯んなものであります青森營林局は青森驛を南方に曲がり約一丁位にして沖館の跨線橋に達します此橋を渡り西方七八丁の處海岸に在ります其隣には秋田木材株式會社青森製材所があり向側は青森木工會社で此の道筋を更に西北に向ふと松田木材會社沖館木材會社があり其の先に無線電信所があります是で青森の視察は終りとなるのでありますが道筋でない會社、工場等は其の町名に依つて道を拄げて御覽に相成らんことを希望するのであります

附け加へて故郷への土産物を少しく申し上げますが來遊者の故郷への土産物として購ふべきは津輕名物たる青森餛飩（曲物入及び瓶詰等あり）若くは青森獨特の昆布菓子（羊羹又は豆類其他數種あり）林檎菓子並に近年盛に各地に輸出されつゝある燒干鰻、貝柱、海參、干鮑、マルメロの

罐詰等にして何れも所在の菓子店、雜貨商或は乾物店に有るも時間の許さざる人々は青森驛前の博品館に至らば是等の總ては購ひ得べし又津輕名物として廣く知られ居る木通蔓細工、林檎、津輕塗等に至りては敢て産物に非ざるも産地同様の價額を以て自由に求め得らるべし又近年玩具として木製の善知鳥彫達摩を作製するもありて各地の博覽會、共進會等に出品して名聲を博してあります昨昭和三年御大典を行はせられたる際に之を献上して 御嘉納あらせられ土産物としては最も好適のものであります



市中名所、神社、佛閣、教會

公園 合浦公園は青森驛を距る東方約三十五町にして地域廣莊海に臨み雄大の景に富めり園内に招魂堂あり明治天皇の御野立所あり老松の並木西より東に走りて龍髯風に和し春は梅櫻を以て人を呼び夏は菖蒲あり躑躅あり藤あり以て遊覽者の目を喜はしむ若し夫れ南八甲田の峻峰を蒼煙の間に望み灣内の樓臺を落霞の外に呼ふに至りては復た他に望むべからず又此の地の海濱一帯は水清く深からず浅からず海水浴場に適し空氣新鮮にして夏季は体育上唯一の運動場たり近く浪打停車場の新設せるあり又乗合自動車常に往來して至極便利なり

歩兵第五聯隊 明治六年三好陸軍中將親しく市外筒井村に地を相し同八年十二月弘前分營を廢し同九年愈々本兵營を創建せらる同十一年小松宮殿下には東部檢閱使として御來臨あり尙同二十六年中伏見宮殿下第四旅團長として御在勤遊はさる

水道貯水場 市外二里横内山麓にあり明治四十二年竣工せり本市を一眸の内に收め眺望頗るよ

ろし本水道は水量豊富水質佳良にして優に十萬口の飲料を供給し得へし

青森縣廳 本市大字長島にあり而して本廳舎は舊藩時の御假屋跡なり知事官邸樓上は明治四十一年大正天皇東宮におわせし時行啓の御座所にして邸内の老松今尙翠綠濃かなり

善知鳥神社（青森市安方町に在り停車場を距る七町）市杵島姫命、多紀理姫命、多岐都姫命の三神を祀る當社の由來を按ずるに人皇十九代允恭天皇の御宇朝廷に呼鳴中納言安方朝臣といへるあり、父子ともに勅勘を蒙り父は奥東に、子は南海に配流せらる、斯くて安方朝臣には東日流外ヶ濱に來る、一夜高倉明神の靈夢に依りて此地に「うたふの里」あるを知る、朝臣其己れの姓に同じきを以て謂へらく普天の下率土の濱王の地にあらざることなし、是れ天我に此地に止まりて王城を守護せよとの託宣ならんと、即ち筑紫國胸郡なる宗像三女神を此に勸請して永く鎮護の神と崇め神號を善知鳥宗像大明神と稱へ奉れり（神は今尙ほ當社の背後なる池中に祠を建て、祀りありといふ、因みに善知鳥と書きて「ウタフ」と稱ふるは往昔此地に沼潟あり葭生ひ茂り名の知れぬ鳥（千鳥ともいふ）棲みけるに人其子鳥を捕へければ親鳥の啼き悲む聲如何にも物哀れに

「ウタフ／＼」といふより此地を「ウタフ」と稱し又葭と善、千鳥と知鳥と訓相同じきより善知鳥と書きて「ウタフ」といふに至れりとも傳ふ説の眞否を知らず）久しからずして安方朝臣薨せしゆえ此地に葬りぬ、後年坂上田村麿將軍東夷征討の時此地に來り大に堂宇を造營せられ又寛永年中に至り舊弘前藩主津輕信政公新に社殿を造築し祭典を行へり爾來年々九月十四日には新穀を神前に供するを恒例とす明治六年九月縣社に列せらる

古歌に「陸奥の外の濱なる呼子鳥

鳴なる聲はうたふやすかた」（定家卿）

「子を思ふなみたの雨の笠の上に

かゝるもわびし安方の鳥」（西行法師）

「紅の涙のあめにぬれしとて

簑をきてとるうたふやすかた」（讀人不知）

又古謡に「烏頭」の曲あり参考すべし

廣田神社（青森市大字長島）天照皇大神荒魂姪子命、大國主神事代主神相殿に中將實方の靈にして詠歌「なかもやる雲井の空はいかならん今そ身にすむ外の濱風」往古中將實方公の草創にして外ヶ濱貝森村へ蝦夷鎮護のため夷の社と稱ひ祭りける由其後開田の守護奇瑞有るを廣田神と祝ける寛永二乙丑年三月貝森村より青森町南の方へ引移奉行森山藏之助天保二年卯年現今の社地へ移轉明治六年三月村社に列せらる

香取神社（青森市大字柳町）經津主神相殿に軻遇突智命の靈にして往古勸請年月不詳と雖元毘沙門天を祭りて青森の郷社たりしが御一新以來神社改正にて香取神社と改稱し明治六年三月村社に列せらる同八年七月本宮香取神宮より御分靈安置崇敬せり

諏訪神社（青森市大字榮町）武御名方神を祭る勸請年月不詳候得共中將實方朝臣の勸請にて寛永年中迄造道浪打と申處に鎮座候處同八年十二月青森港繁榮の爲め堤川添に引移し中古寛文三年外ヶ濱に於て夜毎に西東より電光の如きもの立昇り空中にて左右撃合て碎る音雷霆の互に逆する如く海水沸騰して船々海路通せず依之舊津輕藩主代參を遣し祭事執行然るに神威妙感の瑞的な

るや天忽ち明けく風波繼かに世の人全く諏訪神社の神徳なりと夫よりして代々舊藩主青森通行の節者必ず社參あり尤も明治五年二月類焼後青森堤町より唯今の社地へ移轉同六年三月村社に列せらる

神明宮（青森市大字浦町字橋本）天照皇大神を祭る往古浦町村に鎮座の處寛永三丙寅年伊勢神宮より御櫛並御神璽御下けに付其頃舊領主津輕信牧代御櫛同村百姓勘解由と申者へ預け置勘解由儀御神璽御櫛共村下の神明宮へ安置然るに追々人家も多く相成寛永廿癸未年青森繁榮の爲め當時奉行森山内藏之助願立の上浦町元伊勢と申處より當境内（柳町七番の二號）へ引越青森町中にて神社建立致候由明治六年三月村社に列せらる其後大正十五年九月現在の境内へ移轉せり

久須志神社（青森市大字沖館字千刈）大國主神、少彥名神を祭る延寶五年村中にて建立し明治六年三月沖館村稻荷神社へ合祭同八年二月復社同九年十二月村社に列せられ昭和二年四月一日東津輕郡瀧内村大字沖館青森市に合併編入せらる

常光寺（青森市大字寺町）曹洞宗通幻派にして本尊釋迦如來なり承應二癸巳年當寺三世代天

藝和尚創立長勝寺十四世聖眼和尚勸請開山

正覺寺 (青森市大字寺町) 淨土宗名越派にして本尊阿彌陀如來なり寛永五戊辰年三月十九日開山龍吞和尚創建

蓮心寺 (青森市大字寺町) 眞宗東派にして本尊阿彌陀如來なり創立寛永十七庚辰三月十五日開基越前國米ヶ浦村蓮光寺嫡子教念

本寺は明治九年並同十四年の兩度 明治天皇陛下の行在所としての光榮を有し當時の御座所は永く之を後世に傳へんと専心保護しつゝありしに不幸にも明治四十三年の大火に遭ひたるは恐懼措く能はざる處なり

安定寺 (青森市大字新町) 眞宗本願寺派にして本尊阿彌陀如來なり創立津輕郡元黒石藩圓覺寺隱居釋念西元祿六癸酉年四月一字創建同年七月廿八日開基圓覺寺道場と號す其後二代釋教知元祿十六癸未年六月廿三日日本山本願寺第十四世寂如上人代寺號許可

光行寺 (青森市大字松森町) 眞宗本願寺派にして本尊阿彌陀如來なり明治二十四年十月三十

日舊紀伊國東牟婁郡新宮町第三十二番地より移す開基正珍

蓮華寺 (青森市大字寺町) 日蓮宗にして本尊十界曼陀羅なり宗祖日蓮上人の法弟蓮華阿闍梨蠻夷の諸州に弘法せんとして永仁三未年三月東國に下行し蝦夷肅慎へ渡海を欲すれとも便船の無きを愁て海岸に坐居し龍神へ便風を祈る數日ならずして便を得ると云時の人其の徳を慕て一字を創立して法華堂と云ふ是當寺開闢の根源なり其後慶安三年日住と申僧來て法華堂に居住し承應元年右の堂を轉し寺號に改稱し先僧蓮華阿闍梨の徳を稱して蓮華寺と名け日住を中興として以來代々歴世す

阿彌陀寺 (青森市大字榮町) 淨土宗名越派にして本尊阿彌陀如來なり明治十四年(月日不詳) 正覺寺住職佐藤龍辨の創立に係り其の筋の許可を受け阿彌陀寺の寺號を稱せり

一念庵 (青森市大字安方町) 天和三年六月の創立にして開基青森市寺町正覺寺六代目利山和尚とす天和三年創立前に於て善知鳥山臨濟寺として自然廢寺のありし右跡地にして正覺寺六代目の住職利山和尚老後に至り此地を下して常行念佛一念坊と稱せりと

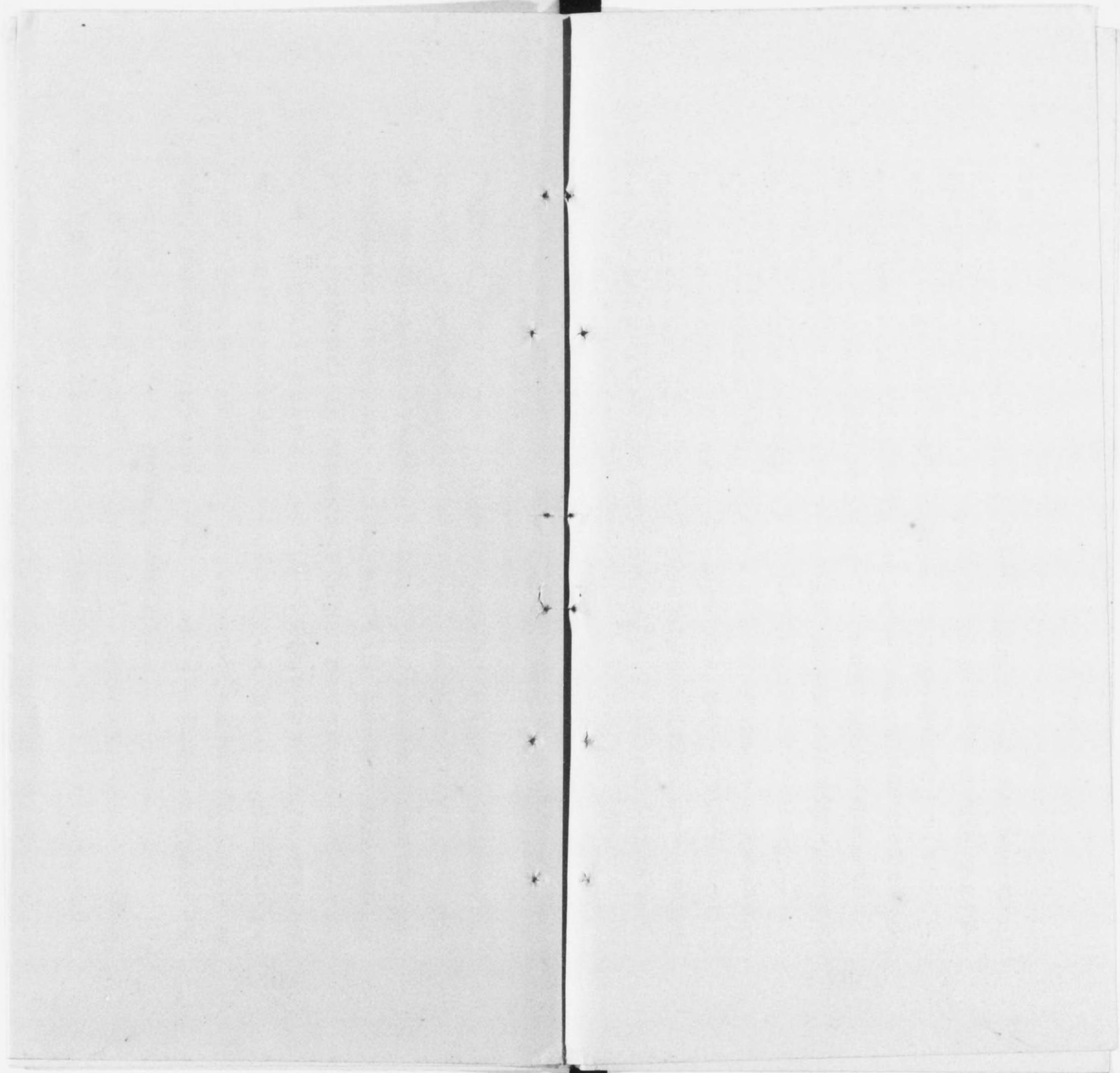
日本基督教會 同會は明治二十四年九月廿六日を以て浦町十文字に集會説教の場所を定め是を日本基督教會青森講義所となせり、其後大工町に移轉と同時に青森傳道教會と改名せり然るに明治四十三年の大火の厄に遭ひ現時の場所（縣廳裏側）に移轉假會堂と定め從來の如く傳道に従事せしが其後本建築を爲し益盛況に向ひつゝあり

聖安得烈教會 同會は明治二十五年新町に一家を借り講義所に充て禮拜説教を開始せしが當時の長老はベージ氏にして同廿七年に濱町に移り次て博勢町に講義所を開きしも暫時にして閉鎖の止むなきに至れり二十九年浦町字橋本百十三番地即ち現位置に新築移轉の上傳道に従事しつゝありしも去る明治四十三年の大火に遭ひ大正二年に再び建設して同三年六月十一日の落成より今日に及ぶ同會は始め日本聖公會講義所と稱しありしも明治三十年以降より聖安得烈教會と改むるに至れり

メソヂスト教會 同會は明治十二年の頃青森大町に於て本多齋氏の開設する處なりしも其後移轉一再ならずして明治二十四年に鹽町（現柴田寫眞師の處）に假會堂を建設して傳道に従事しつ

ありしが漸次信徒の増加するに従ひ會堂の狹隘を感じ明治三十六年現在の場所（稅務署通り）に新築移轉せしが當時の牧師は木原外七氏なりし現在の建物は大火後の新築に係るものなり始め同會は北米合衆國北監督美以教會に屬せしを以て青森美以教會と稱せしも明治四十年六月外國メソシヨンの手を離れ南美以、北美以、カナダメソヂストの三派合同の結果日本メソヂスト教會と稱するに至りしを以て同會も自然青森メソヂストと改むるに至れり

天主教會 入來の年月詳からされとも明治九年の頃今の原子醫院通り角に説教場を設け只管に傳道に従事しつゝありき其後明治十五年に至り佛人フホリ氏濱町に天主公會を設立し當時信徒八十五名の多きに達せり爾來氏は同所に於て傳道の傍ら植物學の研究に努め各地に於て採取せる珍植物數百に及ひ故國大學其他へ送付して其學説を述へ名譽勳章等を授けられしこと一再ならず當地方の斯道有志にして氏の教を受くるもの亦多きに達す氏は去る大正四年七月臺灣に於て病を得遂に不歸の客となりしは惜むべきなり現在の建物は大火後の建設にして現宣教師はマットン氏とて佛國人なり



演劇及活動 劇場としては鹽町に歌舞伎座ありて建設當時は東京歌舞伎座の型に擬せし由にて其の規模から云つても設備から云つても當市隨一のものなるも演劇興行は一ヶ月二回乃至三四回開場するのみにて餘り振はないが近來驚くべく勃興した活動寫眞常設館は古川停車場前通りの青森常設館を首めとし長嶋に電気館あり濱町に遊樂座並キネマ館、鹽町文藝館、堤町に青森館がある以上六ヶ所は常設館にして外に臨時的には古川に共榮館、鹽町の歌舞伎座ありて何れも目新しいフィルムを公開し以て觀客に清新の氣を興へてゐる又遊技場は大町の加福撞球場を筆頭に市内要所〳〵に都合十數軒ありて設備整へり、ゲーム女は何れも美人揃とてファン連を喜ばして居る

遊廊 市内長嶋に在りて江戸吉原の繁榮に因み吉原遊廊と名け青樓軒を並べること二十四、娼妓百二十四名、朝に源氏の君を送り夕べに平氏の公達を迎ふる不夜城の歡樂も近來の不況で沈滞の氣分に蔽はれ勝なるも遊覽者に取りては柳の綠花の紅と共にいつまでも盡きぬは此處ならん

旅館 青森市は古來より開港場にして北海道並樺太との連絡港たる關係上旅客の往來頻繁なりしかば旅館を營む者尠からざりしなり然共時世の進歩に伴れて交通機關の便次第に備はり現時の

如きは連絡船なるものあるのみか停車場には連絡待合所ありて陸より海へ海より陸へと連絡する爲め旅客に取りては殆んど旅館の必要なく従つて旅客を對手として營業する者は獨り旅館に限らず廢業の止むなきに至りしものも亦多々ありき其の上近來淺虫温泉場の發展に伴ひ貴紳士の多くは此處に宿泊するありて本市の旅館營業者は腹背の強敵に尠からざる打撃を蒙りつゝあり現在市内に於て旅舎を以て營業とする者四十九名の多きに達するも二三の一流館を除くの外は概ね下宿業なり今日本市内に於ける旅館として本書中に紹介し得る者は安方町鍵屋旅館、新安方町中嶋旅館、濱町鹽谷本店、同丸宮旅館、新町陸奥館本店、大町の山六旅館、同桂井旅館其の他二三にして特に貴紳士の爲めには鍵屋、中嶋、鹽谷本店、陸奥館本店の四館がある

料亭 現在青森市内を漫步する時は隨所の陋屋に御料理なる看板を掲ぐるもの百六十七軒の多數なるも本書に紹介する料亭とは主として濱町、新濱町にあり青森驛を離る東方約十町の處にして其の名の如く海岸地帯にて官衙あり、銀行あり、會社あり、劇場あり、而も此の間に大小料理店散在して遊覽者に取りては好適の場所なり現在は金森樓を筆頭に坂井家外三十餘軒ありて組合

を組織し協力一致待遇の改善と業務の發展とを專にしてゐるので大小宴會は勿論個人／＼の遊興する者頗る多く二六時中三筋の音の絶へ間無く遠來の御方の旅情を慰むるに充分ならん又藝妓は抱へ共總數二百十餘名ありて一定時刻に見番へ出勤し居り昔は其の言語動作に非難の聲を耳にせしも今は何れも精練せられ毎年中央より權威者を招聘して銳意斯道に精進して居るので技の進歩著しく且つ地方の代表的美人揃として一席聘して無聊を慰むるも興多からん

湯屋及床屋 市内に於て特筆すべきは湯屋と床屋ならん途の一二町を隔てゝ一軒は必ず存在す而も一二の例外あるも兩者必ず軒を併べて營まれ理髪を濟して風呂に飛込むの便あり時期々たる追分節を聞く事もあり夕方より夜分にかけて最も此地の風俗を覗ふを得べし即ち何れの土地に到るも恐らくは湯屋程天真爛漫に風俗を察せらるゝものは非ざるべし方言は遺憾なく發揮せられ人情並近傍の種々なる噂話しに花を咲かす事何よりの好機會と云ふべし湯屋の軒を出れば床屋は湯上りを待受けて仕上げ化粧を行ふを普通とす之れ他地方に於て多く見られぬ特長と云ふべし現在市内に二十八軒在りて何れも浴槽其の他設備は最新の材料を以て建築せられ又床屋は五十有餘

軒あり就中大町に横山と稱する大理髮店あり十人以上の徒弟は客の應接に忙殺せられ其の設備の如きは東北一とも稱せられ遠き道をも厭はず態々此處まで來りて理髮を頼む者さへ有りて其の繁昌驚くべきものあり之れに次ぐは新町の成田理髮店、大町の山口理髮店にして設備の如きは驚くべきものあり

青森市附近の名所舊蹟

横内城趾 明應七年（西歷一四九八年）南部信時兵を遣して外ヶ濱に入り堤浦を取り横内に築きて三男光康に之を領せしむ之を堤彈正と言ふ其の子孫六則景は鬼彈正と稱され津輕氏と婚し九戸政實の南部氏に叛いた時宗家を救援し討死した其の子彈正は津輕氏と和せず爲信の爲めに亡ぼされた

妙見堂 東津輕郡筒井村に在る、堂は嘉吉以前（約五百年前）創建されたもの永祿二年再興され棟札に「北斗寺妙見大菩薩勸請南藏坊」とある再建者は堤彈正孫六であらう境内には枝垂櫻の老樹多く社殿の背後には荒川の深潭流れ老杉亭々として閑雅の趣あり花時男女の参拜頗る多い

雪中行軍記念碑 明治三十五年一月二十三日青森歩兵第五聯隊は山口少佐を隊長とし戦時編成の一隊二百餘名を以て八甲田山を縦断し岩手縣に入るべき雪中強行軍を派遣した此の年は稀有の大雪であつたが一行は田茂木野を過ぎて燧山に差蒐るや大風雪となり加ふるに寒氣甚しく僅かに

十餘名を残して他は悉く凍死した時は同月二十五日で萬死に一生を得た後藤軍曹の搜索隊に遭ひ報告せるに因り始めて手掛りを得たが時既に遅かつた翌三十八年殉難者の墓碑と後藤軍曹の銅像を遭難地に建てた

古戰場 浅虫温泉の西端トンネルの通する處をウトウ梯又トウ前と云ふ以前は碧波岸を洗ふ所梯を攀ちて僅かに通行した險要の地である此處は青森縣最初の古戰場である建久元年（七百三十七年前）藤原泰衡の殘黨大川兼任は鎌倉の頼朝に抗し兵七千を以て陸奥、出羽を蹂躪し後足利、千葉の軍に破れ退いて此の險阻を守り遂に支えずして敗走した處である、次には後醍醐天皇（允享二年）安東堯勢、其の族季長と國境に付き争ひを生じ鎌倉の裁決を乞ふたが久しく決せぬので兩人津輕に歸つて戦端を開いた、北條高時大いに怒り奥羽の大軍を派して之を攻めた時安東氏此處に築きて防ぎ北條勢は痛く疲弊した建武中興は此の困憊に因て成功したものである

唐妹山下作

清水拍堅

老樹參天峭壁連

海風吹送古腥羶

沙鷗不管興亡事

相喚相呼入暮煙

浅虫温泉 浅虫温泉は東北線に沿ひ上野から四百四十七哩青森驛からは九哩の處に在る山郭水境の間靈泉滾々として隨處に湧出し無色無臭の鹽類泉で温度も華氏百七十八度を越えて居る

(イ)沿革 昔慈覺大師が発見したとも云ひ圓光大師の弟子が村民に浴場を作らしめたとも傳へられて居る舊津輕藩主上洛の途次の宿泊所である

(ロ)現況 海岸及び川筋に沿ふて旅館、旗亭櫛比し設備も行届いて居る夏季は海水浴に適し遠近の客が群集する

(ハ)臨海實驗所 浅虫温泉の海面には島が多く寒暖二潮流の魚族が豊富であるので東北帝國大學では臨海實驗所及び附屬水族館を建設し大正十四年から研究を開始して居る

(ニ)浅虫の遊覽地としては湯の島、裸島の舟遊、津輕藩主の馬場山、八幡山、蝦夷館等の登山、茂浦島の養狐、久栗坂の觀音寺等遊覽すべきものがある

小湊市街 小湊町は青森より汽車にて十五哩八の處にあり戸數千余を有し郡内の大邑である康

正（一四五五年）以來南部領となつたが文祿四年（一五九五年）から津輕領に移つた附近の千本並木には平内城址あり延元元年の古戰場である昭和三年七月町制を布かる

(イ) 雷電宮 小湊驛から半里の海岸淺所に在る加茂明神を祀る、田村將軍の勸誘に係ると、眼下海を望み遠淺で白鳥が群をなして居る今は同鳥の保護地として有名である

(ロ) 椿山 小湊の北西三里、田澤村に在る金山椿を以て掩はれ花時江霞、碧海に映じ録繡の美に勝る椿の生ぜる就ては憐れなローマンスが傳へられて居る小詞あり椿神社と云ひ元祿年中黒石藩公の創建であると

田澤椿山

蟹澤紫峯

沙明水碧別爲卿

少女祠邊春月長

夕老爲譚想夫戀

滿山椿樹返魄香

酸湯温泉 青森を距る七里八甲田山の中腹に在る、泉質は強烈な硫黃泉で特効があり三日の人浴を以て一廻りとする近年は道路も開鑿され自動車の便ありて浴客常に絶へず

八甲田山 東津輕郡荒川村に屬し上北郡に跨る高さ五千二百八十尺で本縣の最高峯である、集合火山で山頂には火口があり荒川、駒込川是より發し青森電燈の發電所は此の山中に在る山上奇勝多く加ふるに高山植物に富み目下東北大學植物研究所設置の計畫がある山を下れば十和田湖に出られる

津輕新城 名は新城と云ふのであるが大正二年頃鐵道省に於て驛名の新城は山形縣の新庄と同音にて間違ひ易き爲め變更の希望あり縣廳へ適當の名稱を照會ありて本縣廳に於ては津輕新城とせられんことを回報し驛名だけを津輕新城と改名せられたのである此の地は外ヶ濱最古の城址であつて城の建設者は橋諸兄の庶子橋次信春で保元平治の頃と考へられる明應七年南部信時が外ヶ濱を取り文龜二年に藤崎城を奪つた時橋次信春を藤崎の城代に移し新城を平けて横内に築いたものらしい

戸建澤 新城村から一里の山中に在る澤に臨んだ小山の中腹に岩石が兀立し其の中を穿つたもので中に二三人を雨よけせしむるに足る、傳へ言ふ津輕三代の祖秀直安東氏と戦ひて死し其の子

頼秀逃れて橋次氏に因り後陽成家の女を娶りて此處に匿れ炭焼を爲した所であると

油川城址 油川町の西方十余丁の處に在る創始の年時は不明であるが文安二年(四百七十年前)南部光政が堀越を襲ふた時油川城主奥瀬豊前が戦死したとある大正十三年奥瀬善九郎に至り津輕爲信の爲めに亡ぼされた

油川町 郷社燒野神社は田村將軍勸請の百六十社の一部であると云ふから此處に部落を爲したのは千年以前であらふ其の後奥瀬氏數代の居城として繁昌し大濱と稱され外ヶ濱の大邑であつたが寛永二年津輕信牧が港を青森に開いて移住を奨めてから痛く衰微した

内眞部森林 津輕半島は世界に比類の無い特殊のヒバ材に富み日本三大美林の一と稱されて居る而して其の中心地は内眞部山林である此の地は青森を距る約三里東津輕郡奥内村に屬し青森營林局の輕便鐵道は此處から山中に支線を引いて居る、津輕藩造林に力を盡し當時手入をした模範林は今益美林となつて居る

同古戰場 元享四年から嘉曆二年まで安東の族が二手に別れ互に夷人を集めて交戦した當時録

倉軍の討手宇都宮族、紀清兩黨が來り攻め、淺虫塔前では大苦戦の上録倉軍が勝ちを得た、安東五郎三郎秀久は外ヶ濱内眞部に城郭を構え洪河を隔て、相戦つたと諏訪縁起繪詞に在る、洪河とは今の内眞部川の事であらう

昭和四年八月廿五日印刷
昭和四年八月三十日發行

青森市寺町七十四番地
印刷者 高谷繁太郎

青森市寺町七十四番地
印刷所 青森印刷株式會社
電話 四二〇番

發行所 青森市役所

終